24ColorCard CameraCrazy.com
LEFT
APRIL2013

LIBRARY OF CONGRESS
0 020 208 993 8

INFORMATION CONSERVATION, INC.
NOV.-DEC. 1987

THE LIBRARY OF CONGRESS

ORIENTALIA
JAPANESE
363.8
L3A1

判批ムズシキル

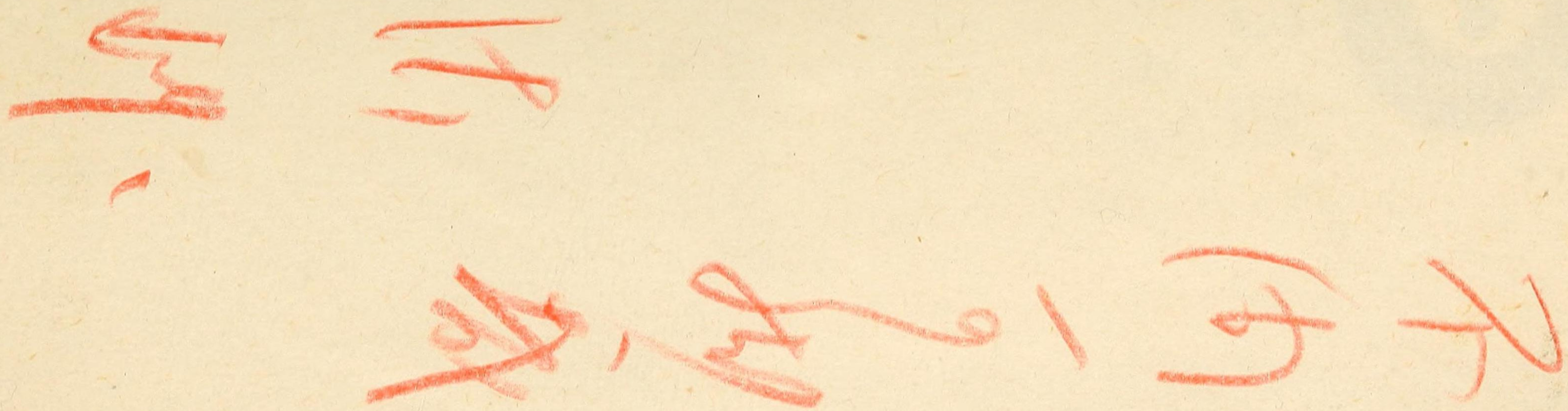
經濟學博士 ヨハンネス・ウラレスス著

30955

上智大學版

THE LIBRARY OF CONGRESS
1800

363.8
L3A1



判批ムズシキルマ

著スレウラ・スネンハヨ 士博學濟經

上智大學版

HX72
.L38
1933
Order
Japan

3
Copy
12
27
49

87-147862
6-11-87
Ep87

緒言

幾百萬とも數知れぬ多數人の社會生活や思想や感情や行爲の上に、カール・マルクス程深刻にして永續的な影響を及ぼした者は、歴史上誠に稀有の事に屬する。全世界の勞働者は、彼を偉大なる論說家として讃仰し、彼の著作物はプロレタリアの福音になつてしまつた。獨逸、英國、佛蘭西、ベルギー、和蘭陀、伊太利、日本はさておき、何よりも露西亞に於ける勞働運動は、詮ずる處マルクスのお蔭で成立するに至つたものである。ソヴィエット露西亞に於てプロレタリアが勝利を博して以來、尙更マルクスとその著書とは、注視の的となり、至る所無邊の關心をそゝることになつた。

勞働者に取つては、マルクスは偉大なる豫言者であり解放者であつて、恰も英雄の如く讃稱されてゐる。資本家に取つては、由々しい敵であるから、自己の力の及ぶ限りの手段は、凡てを動員して之を打ち倒さうとする。マルクスはつまり資本主義を戰鬪場裡へ誘出した者であつて、資本主義派の優秀な經濟學者達は、考へ得る限りのあらゆる鋭智を盡して、彼の體系を科學的に反駁しようと努力してゐる。他の一方に於ては、卓越した社會主義思想家、殊にレーニンの如きは、マルクスの說を更に完成し、實際に移し植え樣と骨折つた。マルクスに關する著書は、大方の圖書館を埋め盡してゐる程で、其の總體に目を通す事は全然不可能事に屬する。殊に其の中には、事實世界の有り

とあらゆる國語が出て來るにおいてをやである。

日本に於てもマルクスの著書は、殊に未だ勉學中の學生の間に於て、生々しい關心を喚つてゐる。故にマルクスの主要なる說を此處に紹介し、その科學的及び世界觀的價値を檢討する事は、決して不要の擧とは思はれない。本著者は、マルクスを以て偉大なる思想家とし、個々の點に於ては彼が全く異常なる慧眼と、深奥なる學力とを現はしてゐる事を認めるに吝なる者ではないが、研究の結果、マルクスの體系は科學上認容するを得ざるものと云ふ斷案に到達した。檢討は、先づ何よりも純粹に科學的探究に依つたのであるが、時には世界觀上の要素を說明に加へた場合もある。

尤も筆者は、マルクス主義を體系としては排さなければならなくなつたからとは言つても、直ちに資本主義の辯護をするものと云ふことにはならない。現在の形に於ける資本主義が非キリスト教的なる事は、決してマルクス主義に劣るものではない。何となれば、資本主義も亦人間を以て物質の奴隷となし、精神的價値の崇高に對しては、一向正當な理解を示してゐないからである。マルクス主義は、資本主義の組織の社會が有つて始めて存在し得るもので、その資本主義の伸展に反抗したものがマルクス主義であるが、只そうする內に互に兩極端に走つてしまつたのである。經濟は人間に奉仕するものであつて、人間が經濟に奉仕するのではなく、經濟生活中に於ても道德律は嚴然として存し、人格者としての人間の品位が保たれなければならない。これを要求してゐるのが即ちキ

0788 186

リスト教的世界觀である。

（註）經濟及び社會問題に對する基督教の態度に就いては、昭和四年に東京の日本刊行會發行の「レールム・ノヴァール

ム」と昭和六年に岩波書店發行の「カトリック的社會秩序改新策」參照。

參考書として使用したのは、マルクス及びエンゲルスの主要著書の外、マルクス批評及び社會主義指導家達の數々の著書である。能ふ限りマルクス自身の言葉を紹介せんが爲に、當該事項は引用文を以てした。併しマルクスは頗る難解な、時には明瞭を缺いた文章を綴つてゐるので、その解說に當つては、細心の注意を拂つた。

著者は遺憾ながらまだ日本語に充分には堪能でないので、特に東京帝國大學經濟學部助教授渡邊信一及び上智大學文學部卒業の井上郁二兩氏の熱心なる御協力を得て、こゝに完成を見るに至つた次第である。兩氏に衷心より感謝せずにはゐられない。

一九三・三・二一　東京上智大學にて

著者

目次

序說……一
社會主義——個人主義の反動現象……一
アダム・スミスの個人主義哲學……三
スミス哲學の批判……七
古典派の個人主義……九
經濟的個人主義の成果……一一
第一章　カール・マルクス、その生涯と事業……一四
第二章　唯物史觀……一九
大要……一九
批判……三一
第三章　階級鬪爭……三五
大要……三五
論證……三八
明確を缺く論證……三九
マルクス階級鬪爭理論の心理的解剖……四五
階級鬪爭理論の眞意圖……四七
勞働苦……五三

高率勞銀經濟……五四
社會的立法……五七
同盟罷業と工場閉鎖……六〇
勞働組合……六一
階級鬪爭說の基督教的批判……六二
第四章　マルクス價値論……六七
價値の計量者としての平均勞働時間……六七
勞働力の評價……七二
餘剰價値……七三
不變資本及び可變資本……七六
餘剰價値率……七八
絶對的及び相對的餘剰價値……七九
集積、窮乏化、恐慌、社會化……八一
第五章　マルクス價値論の批判……八二
價値決定の有用と困難……八二
稀少財貨の價値……八八
勞働單位……八九
矛盾に紛亂せるマルクス……九一
批評家の批判……九五

第六章　其の他の矛盾……九六
企業家所得の説明と論證……九八
集積論……一〇一
大要……一〇一
批判――集積は一般的に非ず……一〇二
獨逸に於ける「集積」――工業……一〇五
農業……一〇八
手工業……一〇九
資本主義の變移……一一二
株式會社と集積……一一六
微力な人々の保護機關――組合……一一八
結論……一二一
第七章　窮乏化説……一二三
大要……一二二
批判――事實はマルクスに反す……一二五
矛盾に紛亂せるマルクス……一二九
産業豫備軍……一四一
總括……一四五

第八章　恐慌論……一四五
大　要……一四五
批判――爾後の史實に裏切られしマルクス恐慌論……一五七
エンゲルスの恐慌論修正……一六二
ゾムバルトは景氣循環は資本主義を利する本質なりと主張す……一六七
今日の世界的不況……一七〇
第九章　マルクス說體系の一般檢討……一七一
科學的社會主義……一七一
資本主義より社會主義へ……一七三
資本主義の歷史的使命……一七六
熱烈なる革命煽動論者マルクス……一七七
自家撞着のマルクス……一八四
先入見に捕はれたマルクズ……一九三
辯證法に誤まられたマルクス……一九五
マルクス體系に於ける二元論……一九七
第十章　結　論……二〇〇

序說

社會主義——個人主義の反動現象

十八世紀は激しい轉換の時代であつた。亞米利加大陸と印度航路との發見以來、西歐洲の世界貿易は經濟上目覺ましい飛躍を遂げてゐる。新發見の世界からは、夥しい金銀が歐洲に向つて流れ込みそれが又母國の生産力を促進してゐる。海外貿易を左右し、若くは尠くとも其れを御し得る國家は何よりも自國の生産物を海外諸國に輸出することを努め、その代償として金銀を獲得して行つた。人々はひたすら重商主義の學說を信奉し、一國の富裕は、輸出を多くし輸入を少くする程增加するものと考へた。かうして本國の生産方面は膨脹する一方になつた。

併し先覺者等は、國家に依つて行はれる輸出入の統制を、不合理なる干涉と感じた。人々の欲する處は、生産力を最高能力にまで達せしめることにあつたのだから、それには生産力が自由發達を遂げなければならぬし、これが尙個人間の自由競爭に迄も押し及ぼされなければならなかつた。併し中世紀に於ける施設は、最早これに適應しなくなつてゐた。無數の制限を有する組合制度は富裕になつた實業家に取つては、邪魔であつた。封建制度の農業は、急速に增加する人口を扶養するに足らなくなつて以來既に久しかつた。英國に於て中世紀の末葉に當り、人々が耕作地を牧場に變へ

たのは、農業が最早利益を齎さなくなつたことが、その一面の理由であつた。つまり農作物は海外諸國から輸入し、その支拂には、工業製品を以て代償とすることが出來たからである。

實業家が皆海外との取引に依つて大資本を蓄積した時分には、新しい生産形態に對應して更に廣範圍に亘る分業が起つて來た。農業の衰微の結果そこに不要になつた勞働力は、こちらの新しい事業の方へ轉用されるやうになつた。これで、來るべき産業革命への道ならしが出來た。即ち、人口は過剰であり、資本は集積され、分業は頗る進捗してゐるのだ。無論これだけでは、まだ缺けてゐる要素が一つあつた。大量生産にとつては根本的な要素、即ち機械が缺けてゐる。しかしこれとても待つ程もなく、十九世紀になる少し前には、もう蒸汽機關が仲間入りをしたので、此處に全く生産機關の急激な變革に對する全部の用意が整つた。こう云ふわけで、中世紀の社會組織が最早不適當になつたことは明であつた。たゞ問題は、如何なる新しい組織を選ぶかと云ふ一點にかゝつてゐたのだ。

歐洲大陸の發展は、一七八九年の佛蘭西大革命に依つて促進された。この革命は、佛蘭西の貴族階級から、總ての特權を剝脱し、市民に對して完全な自由を齎した。

此の政治上及び經濟上の制限を全部排擊しやうと云ふ熱望は、佛蘭西にあつては、誤つた施政方針から生れたものであつたが、（貴族と僧侶とは全然租稅の義務を免除されてゐたに引換へ、市民と

農民とは重稅のもとに呻吟してゐた）しかし經濟的には當時更に進歩してゐた英國にあつては、事情が全然異つて居た。こゝでは貴族階級の優位は左程問題視されることなく、勃興しつゝある市民階級は、海外貿易や製造工業に依つて莫大なる資本を集積してゐた。要するに、此處でこそ產業革命に對する基礎が準備されてゐたのである。それだけに、經濟界の自由發達から見て、制限と云ふ制限は、凡て餘計に障碍物と考へられずにはゐなかつた。」

アダム・スミスの個人主義哲學

此の時代の精神は、スコットランドの哲學者にして同時に經濟學者であつたアダム・スミスの著書の中に見ることが出來る。その經濟學說を完全に了解するためには、その哲學的根據を調べることが必要であつて、彼はこれを「道德感情論」(1)の中に敍述してゐる。スミスは新國民經濟學の創立者であるのみならず、經濟的個人主義を唱導した最初の主要人物でもある。彼はグラスゴー大學の敎授であつたが、前述の著書の中で、スコットランドの道德哲學派に屬する者である由を告げてゐる。

(1) The Theory of Moral Sentiments

スミスの經濟哲學に關する學說は大略次の如くである。

『自然と云ふものは、吾々を大抵の事に於て本源的なありの儘の本能に依つて導いて行くものだ。……此の本能に對しては、吾等の理性の働きは、まるで指導することにも支配することにも役立たない。その偏理的認識の内容、即ち何を爲すべきか或は何をなすべからざるかに對する一般的な實踐上の判斷は、寧ろ全く歸納の方法に依つて獲得するものである。言ひ換へれば、自然の本能が人間に提示する要求を觀察したり、殊に吾等の内部にあつて或る行爲を直覺的に是認乃至は否認してのけるあの偶發的に働きかける力、即ち同感の感情（Das Gefühl der Sympathie）に依つて獲得するものである。（注意、スミスの云ふSympathyを普通の意味たる好意と解釋してはならない。スミスに依るとこゝに云ふSympathyとは、道德的なものの全然主觀上及び經驗上の認識原則となつてゐるものを云ふのである。彼に依ると道德的善行とは、教養あると同時に公平無私の立場にある第三者が、同感Sympathyを持ち得ることに限ることになつてゐるからである。）スミスが如何にしてこう云ふ解釋に到達したか、又は如何なる世界觀の上に彼の道德原則が立つてゐるかは、こゝでは別に重要な問題ではない。簡結に說明すると、彼はつまり自然主義の有神論者であつたので、神は世界を創造したには違ひないが、併しその後の世界の運行に就いては、一向直接に關與しないと云ふのである。世界の運行は恰も精巧に造られた時計の働きのやうなもので、時計師は自然法則を通じて自分の意志を一度きり表現すれば、他は齒車が自力でやつて行くのだ。人間には、創造主の

意志は、自然の本能の中に示現されてある。吾等が此の自然の本能に從つて行爲すれば、吾等は人類の至福――これは云ふ迄もなく自然の大目的だ――を促進すると云ふ最も有效なる手段を利用することになるので、こうなると吾等は或意味に於て神の協力者だと考へることが出來るし、又吾等に關する限りに於て、吾等は神の計畫の實現を助力するものと云ふことが出來る。これらの本能の內、スミスに從へば、何よりも先づ利己的本能が吾等の興味を奪つて行く。それでも各個人が思ひ思ひに我慾を張つて行くなら、間もなく大多數の者が、地上の財貨を共に樂しむことから除外される結果になるだらう、などと攻擊しようものなら、スミスは浩然として、利己本能こそそれの動く儘に任せて置きさへすれば、不自然のない最良の財貨分配に導くもので、その動きが極度に達し、好意などは全く消失したかのやうに見える處に於てすら、何等の故障の起らないものだと主張するその例として彼は情を知らぬ貴族を引證し、多額の收穫を自分一人で思ふ存分に消盡しやうと慾張つてゐるにも拘はらず、收穫を齎す者や食事を調へたり身の廻りの世話をする者等多數の人々に、收穫の幾分を頒たずにはゐられなくなつてゐる。それでも本人は全部を一人切りで費消してゐるものと思ひ込んでゐるかも知れないが、實は多數の者がその費消に與つてゐるので、恰も此の貪慾な彼氏が、計畫を立てゝ全部を分與しようと計つたかのやうな結果になつてゐる。これを押し廣めて云ふと、或る土地の產物はいつの時代にあつても、その土地を耕作する殆ど全部の住民を養つて行

くものだと云ふことになる。或る「見えざる手」が、凡てを導き、結局最も美しい調和を來すやうにしてゐるのだ、」と主張する。これらのスミスの所説中には、限度を知らぬ我慾が、露骨に辯護されてゐる。

それでもスミスは利己心の限界をも論述し、賢明、正義及び好意を以てその周壁としてゐる。尤もこれらは正しい意義（と云ふのは即ちスミス的）に解されなければならぬ。賢明の任務は、健康と資産との示す處に從つて、吾等の情慾と渇望とに限度を與へる點にある。つまり吾等は、情慾の満足に當つて、健康と資産とを痛はるのである。これは勿論賢明には違ひないが、併し單に賢明なる自我愛、即ち「打算的な儲け」に過ぎない。こんな賢明は、公益に役立つものではなく、徹頭徹尾當事者に仕へるだけである。

正義も亦全然個人的に考へられてゐる。同胞に對して、その人格、財産又は名譽に何等積極的な損傷が加へられない限り、正義は守られてゐるのだと云ふ。

好意はスミスに從へば、社會の存立に必須なものではなく、どこ迄も社會の花たるに過ぎないもので、言ひ換へれば「裝飾は建築物を美化してゐるが、併しそれを支持する基礎ではない」のと同じである。好意が缺乏してゐるだけの事では、實際上積極的な害惡は生れて來ない、とスミスは云つてゐる。スミスは只突發する衝動的な好意に就いてのみ述べてゐるのであるから、かゝる本能的

な好意が、偉大な效果を齎し得ないことは解り切つた事で、大部分の場合と迄は行かなくとも、少くとも多數の場合に於ては、もつと遙に強い同じ本能的な自我愛に依つて、徹底的に踏みつぶされ跡かたもなく除去されて了ふにきまつてゐる。

自己愛の三境壁も根底に於ては結局利己主義以外の何ものでもない。即ち賢明は、健康と資産とを守護し、人から自己が害はれた時には、正義が其の賠償を要求するし、好意感はそれが起らなかつたところで別に疚ましい感じも起らない程のもので、我々を親切な行爲に導くのは、それに依つて得られる報酬を意識し、愉快に思ふからのことである。これ等は凡て生粹の利己心、所謂エゴイズム以外の何物でもない。」

スミス哲學の批判

スミスが人間性を全く誤認してゐることは明かである。人間の道德的行爲を決定するものは、衝動的な本能ではなく、合理的な理性の聲でなければならぬ。尤も理性的な人間も、本能から來る衝動（情慾）を比較的高い目的の爲に利用し得るが、併し此の衝動は盲目であるから、本人が誤謬に陷らない爲には、理性に依る指導が必要である。人間の行爲が、徹頭徹尾衝動の生活に依つて築かれるものとすれば、人間は、理性を有しない動物と同じ段階に立つものと成る。事實、スミスの道

徳は動物に對してこそ適合するであらう。それでは最早道徳ではなく、衝動的な原始的行爲と呼ぶ外はない。ところが人間は、二種の性質を持つてゐる。動物とも共通する自然の衝動に導かれる官能的なものと、また理性の法則に從はずにゐられないと同時に官能的な衝動を其の法則に從屬せしめて行く精神的なものとである。

彼の道徳論に依ると當然個人の自由を能ふ限り極度に許して置くことは、全體の幸福を最もよく保證するものと云ふことになる。故に國家は、經濟生活に干渉してはならないのであつて、各人は何が彼に役立つかを自分でよく知つてゐるのだから、私的關心を的確に追求して行きさへすれば最もよく公安に資して行くのである。實際スミスの國富論中に於ける經濟政策の基礎觀念は、私經濟に對する自由の要求又は産業生活の個人主義論なのである。「自然的秩序」とか「事物の自然的運行」が、至る所に强調されてゐて、國家や組合等の社會力による自由の制限に對抗せしめられてゐる。アダム・スミスがグラスゴーの教授であつた時、或る定説が彼の創見である由を説明する爲、一七七五年に其の地の或協會に寄せて來た原稿の寫しの中から、デュガルド・スチュワート(Dugald Stewart)は、次の樣な興味ある句を發表してゐる、『通常人間は政治家や策士から、政治の機關に對する材料だと考へられてゐる。策士達は自然が及ぼす人間界への作用を亂してゐる。自然は只其の儘に働かせ、有りの儘の窮極に達する樣に其の目的を妨げることなく追求せしめて置けばよい

のである(2)』

(2) The collected Works of D. Stewart, ed. by. W. Hamilton, X(1877)58.

此の說はスミスが「富國論」の第四卷第二章中に述べてゐる事と合致する。卽ち『各個人は、自己が使用すべき資本に對する最も有益な狀態を導き出すように心掛けてゐさへすればよいので、これでは自分自身の利益のみを思ひ、國民の利益などは眼中に無いやうに見えるが、併し、自己の利益のみを考量してゐることこそ全く自ら、と云ふよりも寧ろ必然的に、それが社會全體に取つても同時に最も有利であると云ふやうな利益を、選む樣に成るものだ(3)』と云つてゐる。

(3) The Wealth of Nations, ed. by Edwin Cannan 1922, Vol. I. P. 419

古典派の個人主義

私慾主義はいつでも自然に、乃至必然的に公安を保つものだとする原則は、アダム・スミスに依つては、まだ完全な徹底の域にまで到達され得なかつた事は、認むべきである。寧ろ彼はいろいろの箇處で、個人の私的利益と國民の公安とが相反する可能性をすら强調してゐる程である。彼は唯私的利益と一般利益との一致する場合が屢々あると主張するに過ぎない。其後の自由主義の國民經濟學者達は、更に歩を進め、既に過去に屬するDupont de Nemour の學說を再び持ちだした。同

氏の主張は、各人はその利益を妨げられることなく追求して行くことに依つて、常にまた社會の利益を促進するものだと云ふ。(4)スミスの説は更に補塡され、國民經濟學の「古典」派を代表する人々、殊に佛國のJ.B.Sayや英國のマルサス、リカルド及び部分的にはヂョーン・スチュアート・ミル等に依つて傳播され、次第に西歐洲のあらゆる國々や北米合衆國などへも侵潤するやうになつた。此の個人主義派の根本的要求は、强制的な組合や、資格審査の免狀などの無い産業の自由だとか、勞働契約の自由、經營に制限の附せられないこと、及び各人がその好む處に居住し勞働し得る一般的移住權と云つた經濟上の自由であつた。尙その上に財産の絶對自由と共に亦土地私有の絶對自由をも要求した。凡ての財産は流動してゐなければならない、相續物件の賣却、不動産の分割及び抵當權などに關する制限は、一切消滅すべきである。これでこそ各人は、妨げられること無しに産業に與り富み榮えて行くことが出來る。その外、生産や販賣の自由競爭、需要供給の狀態や價額の格付を放任する市場の自由、契約の自由、利率の自由、投機の自由、株式會社の自由、等々。自由を社會問題として取扱ひ、獨り權力のある者のみではなく、凡ての人間が自由であり幸福になる爲には、社會狀態や國民經濟狀態を、如何なる形に持ち來す可きかを考へる代りに、自由と云ふことだけが、殆ど獨專的な幸福への道と考へられた。凡てに對して「自然」の自由を要望し、その代りに各人に對しては、完全な幸福を約束した。但し此の所謂自然の自由と云ふのは、個人の絶對的

自主獨立を意味したもので、財産の處置法は、社會的共同生活の要求を顧慮した法律上の關係からは引き放され、財産の觀念は、抽象的に見た個人の自由と同じ範疇に屬せしめられるやうになつた結果、事實上財産は、無生物界に迄延長された人格の觀を呈するに至つた。嘗ては家族や地位や職業や乃至は國民や國家等の幸福の爲に拂はれてゐた顧慮は、凡て否應なしに消滅しなければならなかつた。個人の自由から誘導された權利を、時代と共に變移した世相、と云つても全體の目的から見て社會的及國民經濟的共同作業上必須缺く可からざる要求、などとも合致せしめ得るやうな、生命力ある制度を、既に時代遲れになつた諸形式の代りに設立すべき筈であるのに、こんな事には理解も意志も缺けてゐた。昔の社會秩序は凡て、恰も倒れかゝつた家屋のやうに、破滅に委ねられた(5)そこで經濟の原野の上では、各個人が生存競爭の戰を激しく決しなければならなかつたが、國家はこれを袖手傍觀してゐることになつた。

(4) Abrégés des principes de l'économie politique 382.

(5) H. Pesch: Lehrbuch der Nationalökonomie, 3.-4. Auflage, Freiburg 1924, Bd. I, SS 294-300.

經濟的個人主義の成果

これがあの頗る稱讃を博した自由競爭であつて、强者や有力者に取つては、甚だ好條件に違いな

いが、しかし同時に弱者の滅落であり、從つて本當の社會的及び國民經濟的進歩の前提などは、似ても似つかぬものであつた。このやうな經濟上の自由には、人間の社會性がよく推算されてゐないで、唯經濟上の我慾に導かれた個人主義の利己だけが、我物顔に濶歩してゐる。かゝる個人主義說は、支配階級、殊に勃興しつゝある市民間に反響を起し、個人主義を基底として經濟生活を全然變更せしむるに至つた。これから後は、直接に消費者の爲ではなく市場の爲に生產されて行つた。その結果はやはり現はれずにはゐなかつた。生產過剩、弱小生產者の否定、大失業群、全經濟生活の停頓及び異常な社會不安等。生產者が各々市場を征服し巨利を獲得せんとする限り、一方では競爭者よりも價格を廉にし、他方では勞働賃銀を最低率に迄引き下げなければならなかつた。勞働者達は、正當の賃銀を支拂はしめんが爲に、職工組合を造つて團結しやうとしたが、支配階級はこのやうな機關を壓迫した。それだけでは足りなかつたと見えて、個人主義の部に編入された新國民經濟學は、勞働者達に向つて、勞働賃銀は自然の法則に從つて固定されてゐるもので、生產全部を危くしない限りは、最低生活費以上に登ることが出來ない由を說明することに骨を折つてゐる。或は說いて曰く、『一つの勞働團が、組合の盡力に依つて賃銀を高くする事に成功するやうなことがあれば他の勞働者達はそのために迷惑する結果になる。何故かと云へば、賃率なるものは、世界の如何なる力も動かすことの出來ない鐵則のもとにあるものだからである』、と。このやうにして資本（と云

ふのは即ち生産者）が互に競爭の刄を喉元に擬しあつてゐる時、勞働者達は非道の極みを盡して搾取されてゐた。勞働者の自由を縛る政治上の限界は退けられたには違いないが、凡てを支配しつゝある資本に對抗して見ると、勞働者等は反つて不自由になつてゐた。機械に依れば勞働の節約が出來るのであるから、勞働時間の短縮を期待するのは當然の歸結でありながら、その結果は全く正反對になつた、勞働者は工場主の共同生産者及び增財者として人間らしい勞働條件への要求を持つてゐるのに、工場内に於ては、勞働者の健康問題などすら殆ど顧慮されてゐなかつたとすると、益々奇怪だと云はざるを得ない。恐慌が起ると生産者も利益が擧らなくなつて深酷な打擊を蒙るには違いないが、自分は勞働者を解雇し彼等を成るが儘に捨て去る事に依つて、最大の負擔から免れる。

こんな調子で折角稱揚された個人の自由主義も、實際には人類の幸福とはならなかつた。多くの人々は競爭に依つて資産を失ひ、勞働者の大群は食の無い日が相ひ交互し、經濟危機は全社會生活を震盪し、僅に二三の者のみが巨額の富を蓄積した。これが十九世紀の前半に於ける初期資本主義の有様である。社會主義の發生を理解しやうと思ふならば、これらの事象を思ひ浮べなければならぬ。社會主義とは、これらの狀態が勞働者階級に反一七八九年の佛蘭西大革命は、貴族と僧侶との特權を排し、勃興しつゝある市民階級に政治上の優越權を齎したが、それが半世紀後の一八四八年には、プロレタリアは同じく啓蒙學者等の國家哲學を基礎として、私

有財産の件に至る迄も含めて、有りとあらゆる物の絶對平等を實現せしめようと試みた。これは不成功に終つたけれども、凡てが平等であると云ふ風な無階級の社會を將來せんとする夢は、決して勞働者社會からは、消え去らなかつた。」

第一章　カール・マルクス、其の生涯と事業

初期資本主義の甚だしい弊害は、勞働大衆を資本主義組織に對して煽動し、資本主義の沒落を誘起するのに豊富な材料を提供した。學問の名に於て此の新しい無階級層の社會を宣言する爲に、大衆のこのやうな調子、と云ふよりも寧ろその變調を、一致の組織に纒め上げるには、誰か一人出て來さへすればよかつたのである。此の一人と云ふのが、所謂科學的社會主義の創設者たるカール・マルクスとして現はれた。透徹した眼を以て彼は、資本主義組織の害惡を敍し、この害惡が、殆ど手を加へる要もなくその儘で、社會主義社會へ導いて行くものである由を說明しようと試みた。處で彼は決して夢想家ではなく、嚴密な學問的な研究の上にその體系を打ち立てゝゐるので、今に至る迄、資本主義に對する最も成功せる鬪士たることに變りはなく、從つてこゝ八十年來の社會主義上のあらゆる努力は、殆ど凡て彼に源を發してゐる。

彼の同志のフリードリッヒ・エンゲルスは、「科學的社會主義」建設の共力者と見做され得るし、

また事實屢々そう思はれても居るが、その理論を創立したのはマルクスであり、これが又彼の有名な科學上の業蹟たる「資本論」の中に最も明にされてゐる。

マルクスは西暦一八一八年五月十五日、獨逸國のトリエルに生れた。彼の父は猶太人で後にプロテスタントに改宗した辯護士であつた。其祖父の代に至るまで、代々の先祖はモルデカイ(1)の姓を稱し、數百年來猶太教教師であつた。マルクスはボン大學とベルリン大學とに於て法律學、哲學及び歴史を學び、一八四一年エピクルスに關する論文を提出して學位を得た。彼は大學講師として身を立てんとしたが、其の政治上の見解のために目的を達しなかつた。そこで彼は一八四二年ケルンに至り「ライン新聞」の編輯を引き受けた。此の新聞は自由平民主義者の利益を擁護するものであつたから、マルクスに經濟問題を研究する機會を與へた。けれども其の翌年には、同新聞は既にプロシヤ政府に廢刊を命ぜられたが、一八四三年の秋巴里に赴き、其處でアルノルド・ルーゲ(Arnold Ruge)と協力して「獨佛年鑑(2)」と云ふ雜誌を創刊し、又ハインリッヒ・ハイネ(Heinrich Heine)と共に「フォルウェルツ」(Vorwärts)と云ふ新聞を主幹した。巴里で、マルクスは佛國社會主義者のサン・シモン(Saint-Simon)や、プルードン(Proudhon)や、コント(Comte)と知合になり大に學ぶ所があつた。一八四五年の始め、マルクスは佛國から放逐せられ、白耳義の首府ブラッセルに逃れたが、三年の後には同地をも去らなければならなかつた。そこで彼は再びケルンに歸り或

る新聞の主筆となつた。此の新聞は「新ライン新聞(3)」と云ひ、民主主義者及び共産主義者の利益を代表するものであつたから、マルクスは自己の共産思想を宣傳する機會を見出した。けれども豫期の通り其の後間もなく再び政府と衝突して、其翌年同地より立退を命ぜられた。彼は暫時巴里に滯在した後、倫敦に至り、同地に永住することになつた。其處で、彼は一八六四年九月二十八日に所謂最初のインターナショナルなる萬國勞働協會(4)を創立し、一八八三年三月十四日に死亡した。

(1) Mordechai

(2) Deutsch-Französische Jahrbücher

(3) Neue Rheinische Zeitung.

(4) Internationale Arbeiter-Assoziation.

マルクスの同志たり同時に長年間の共力者であつたフリードリッヒ・エンゲルス(Friedrich Engels)は、一八二〇年の十一月二十八日に、バルメン Barmen の或る製造業者の子として生れた。」彼は商人となり、父の關係してゐた英國の工場で商人として三年間働いた。シャルチスムス Chartismus の名に依つて知られてゐる英國の勞働運動は、彼は熱心に觀察し、一八四五年故郷に歸つて間もなく、その成行を研究の結果と相俟つて『英國に於ける勞働階級の狀態』(5)と題して書き

纏めた。一八四四年にエンゲルスはパリーでマルクスを知り、一八四五年から四八年に至る迄、一緒にブルュッセルに住んでゐた。四八年から四九年に至る迄、マルクスと共に新ライン新聞の編輯に與かつた。一八五〇年には彼は再びマンチェスター工場の店にゐた。六九年からはロンドンに居て、一八九五年八月六日に死ぬ迄そこで勉強してゐた。

(5) Lage der arleitenden Klassen in England

マルクスの主なる述作は次のやうなものである。但し一部分はエンゲルスとの共著である。

Die heilige Familie gegen Bruno Bauer und Konsorten. (1845) Misère de la philosophie. (1847,1896)(これはプルドンに反對して書かれたもの獨逸語では Das Elend der Philosophie として出版されてゐる。)

Manifest der Kommunistischen Partei (通常 Kommunistisches Manifest と呼ばれてゐるもの。共産黨聯盟の依囑として エンゲルスとの共力に成り 佛蘭西の年二月革命の前夜に出版された。)

Die Klassenkämpfe in Frankreich.(1845)

Der achtzehnte Brumaire des Louis Bonaparte (1852-1889)

Lohnarbeit und Kapital. (1892)

Zur Kritik der politischen Ökonomie. (1859 第一册出版)

Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie. I. (1867)

第二版はマルクスの手に依て1872年に出版された。第三版1883. 第四版1890はエンゲルスの手に依る。第二卷はマルクスの死後 1885年にエンゲルスに依つて出版された。第三卷は上下の二部に分たれ 同じくエンゲルスに依つて1894年に出版された。)

Die Theorien über den Mehrwert (1905-10) (これはカウッキーがマルクスの遺稿を纒めたもの)

エンゲルスは以上の外主要著書として次の如きものがある:

Umrisse zu einer Kritik der Nationalökonomie. (1844)

Zur Wohnungsfrage. (1872)

Die Bakunisten an der Arbeit. (1875)

Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft. (1877. 第二版の Anti-Dühring は 1886.)

Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft. (1882, 1891)

Der Ursprung der Familie, des Privateigentums nnd des Staates, im Auschluss an

Lewis H. Morgans Forschungen. (1884. 1898)

L. Feuerbach und der Ausgang der klassischen Philosophie. (1888. 附錄として1845年に發表された Karl Marx über Feuerbach が加へられてゐる。)

In Sachen Brentano contra Marx. (1891)

第二章　唯物史觀

大要

マルクスの經歷は、其學說體系を理解するために頗る肝要である。之に就いてマサリクMasaryk は次の如く書いてゐる、『カール・マルクスは其一身に新しい諸勢力（即ち四十年來の思潮）を殆んど悉く融合した。ベルリン大學のヘーゲルは彼を歷史哲學と政治哲學とに導き、其歷史哲學はフォイエルバッハの宗教批判によつて唯物的且社會的なものになつた。一八四三年巴里に來たマルクスは佛國の社會主義と實證主義（ポジチヴイスム）とを學んだ。サンシモン、プルードン、コントは數年間彼の師であつた。佛國と白國より放逐せられて、最後に英國に逃れ、一八四九年より死に至るまで殆ど其處を離れることなく、英國の社會主義、經濟學及び英國の社會的發展などに就いて激しい勉强を續けた。其時迄實際的指導者の任に當つてゐたマルクスは忽ち一變して「インターナショナル」（萬國勞働協會）

の首領となつた。彼の生涯は獨逸のヘーゲル學徒より佛蘭西、英吉利の實證論者、歴史的唯物論者となり、終に國民經濟學の專門的研究に當つて其の哲學を踏臺とするようになつた』(1)

(1) Masryk: Die philosophischen und soziologischen Grundlagen des Marxismus, s. 38

ベルリン大學に於ては、マルクスはヘーゲルに熱く心服してゐた。特に此の大哲學者の發展の理念に心醉した。ヘーゲルの說によれば、萬物は精神(ガイスト)即ち觀念(イデー)の間斷なき發展に外ならない。一切萬物は有と無である。連續せる轉成Wordenと消滅 Vergehen である。ブラウエル教授 Prof Brauer は之に就いて次の如く書いてゐる『ヘーゲルの云ふ辯證法とは一切の世界發展の根底になつてゐる觀念が、完全なる內容に達して行く道である。ヘーゲルは、一切の實際を精神の發展過程から導き出そうと努力する。而して觀念の辯證的運動は正 Thesis 反 Antithesis 及び合 Synthesis の三階段に行はれる。正としては一定の概念が置かれ、反に於てはその概念の反對が現はれ、合は前の一階段を綜合し、命題と反對命題とが正及び反として表現し得るよりも一層內容の充實した一體に結合する。正の中にある概念の否定は推し進める處の絕えず運動を呼出す要素である……概念が其全內容を辯證法に依つて絕體觀念の充實に展開した時に、始めて其運動は終熄する。精神の生活過程の終局には絕對がある。其は本質的には「成果」Resultat で、轉成する者、自我自身轉成者の主體 Subjekt des Sichselbstwerdens であつて、これが最後に至り始めて眞理中に於ける絕對なるも

のゝそれなのである。」

Theodor Brauer: Der moderne deutsche Sozialismus, Freiburg 1929 S. 283.

故にヘーゲルの説によれば「凡て現實的なものは理性的で又凡べて理性的なものは現實的である」青年マルクスは、ヘーゲルの此の革命性を好愛したけれども「絶對觀念」を發展過程の運搬者として高調する點を嫌つた。尚又ヘーゲルの主張した絶對眞理と國家の神格化もマルクスの心に適合しなかつた。そこでマルクスはヘーゲルの辯證法をフォイエルバッハの唯物論と結合した。此の哲學者の説に據れば、世界は精神の産出物ではなく精神其者が物質の最高の産物なのである。斯樣にしてマルクスはヘーゲルの辯證論的發展觀念を取り之にフォイエルバッハの唯物的一元説を合せて自己の唯物的歴史發展説を構成したのである。

マルクスの唯物史觀の根本觀念は「共産黨宣言」（4）の中に述べられてゐる處である。曰く「主として宗教家や哲學者や又は空論家側から揚げられる共産主義への非難は、詳細に研究して見るには當らない。生活狀態や環境や社會生活と共に、人間の考へ方や見解や概念等、一言にして盡せば人間の意識、にも變化を來すと云ふことを了解する爲には、果してもつと深酷な見識が必要であらうか。思想史は、精神の所産も物質のそれと共に變化することを證明してゐるに外ならないではないか。」

(4) Das Kommunistische Manifest.

處がマルクスの「經濟學批判」(5)の序言を見ると、そこに彼の歴史哲學の典型的定說が出てゐる。それに依ると『人類は、彼等の生活の社會的生產に於て、一定の、必然的の、彼等の意志より獨立せる關係を、即ち彼等の物質的生產力のある一定の發展階段に適應するところの諸々の生產關係を、與へられたものとして受け取る。これ等の生產關係の總和は、その社會の經濟的構造、即ち法制上の及び政治上の上層建築がその上に立ち、一定の社會的意識形態がそれに適應するところの、現實の土臺をなす。物質的生活資料の生產方法は社會的の、政治的の及び精神的の生活過程一般を條件づける。人類の意識が彼等の存在を定めるのではなくて寧ろその反對に、人類の社會的存在が彼等の意識を定めるのである。社會の物質的生產力は、その發達のある一定の階段に於て、從來それかその內に活動してゐたところの現存の生產關係、或はたゞその法的表現に過ぎざるところの所有關係と、衝突するに至る。經濟的基礎の變動するにつれて、巨大なる上層建築の總ては、或は徐々に或は急速に變革する。斯る變革を考察するに當つては、我々は常に、經濟的生產條件の上に起りし、自然科學的に忠實に證明し得る物質的變革と、人類が依つて以て此の衝突を意識し且つ決戰するに至るところの法制上、政治上、宗教上、藝術上、或は哲學上の、簡單に云へば觀念上の、諸形態とを區別しなければならない。……或社會組織は、生產力がその組織の許す限り

發展してからでなくては、決して滅亡するものではなく、また新たなより高度の生産關係はその物質的存在條件が舊社會身體の母胎内に於て孵化し了るまでは、決して舊社會組織にとつて代るものではない。……資本家的の生産方法は、社會的生産過程の敵對的形態を採れるものゝ最後である、茲に敵對的といふのは、個人的敵對の意味ではなくて、個人の社會的生存條件から生ずる敵對の意味であるが、然し資本家的社會の母胎内に發展せる生産力は、同時にこの敵對の解決に必要なる物質的條件を作る。されば、人類社會の前史は、この社會構成を以て終りを告げる譯である。』(6)

(5) Kritik der politischen Ökonomie

(6) 引用文は宮川實化譯經濟學批判（叢文閣發行）に依る、

此の二つの文章を見ると、マルクスが物質上の生産狀態を以て、世界の事象中人間の思索や行爲を左右する窮極の要素と考へてゐることが明瞭である。物質上の生産狀態が基礎工事であつて、此の上に精神の、乃至イデオロギーの上部工事が打ちたてられるとする。言葉を換へて言へば、政治、法律、美學、宗教及び哲學などの人間の思想は、歴史上の各時代に於ける生産條件から生れる當然の結成物である。又は、經濟が人間の全社會生活及び全精神生活を支配すると云ふのである。後にはマルクスはエンゲルスに送つた二三の手紙の中で、凡てを決定する筈の物質的生産狀態の力を、いくらか限定しやうと試み、歴史上の決定要素であるにしても、これが唯一のものでもない由を強

調してはゐるものゝ、經濟を以て、凡てのイデオロギー要素の最後の源泉と見てゐる點に變りはない。經濟が所有狀態を決定し、これから法律、政治及び哲學の上部工事が出來る。即ち、法律、政治及び哲學の觀念は、結局經濟の方法如何にかゝつてゐるもので、これがまた逆にその物質的基礎たる生產狀態に影響して來る。生產狀態が變つて來ると、人間のイデオロギーも遲かれ早かれ變つて來る。即ち、新經濟時代の出現毎に、それに適應した新しい上部工事が打ち立てられ、しかもこれは辯證法的相反方式の要求するやうな對抗物の形成に依てゞある。併し經濟狀態が變化する時、所有關係と社會的全上層工事は、初の間はまだ變化を來さずにゐる。そこで生產狀態が次第に社會や政治上の施設、殊に所有關係と矛盾して來る。かくて階級の對立が始まり、これが益激しくなつて行つて、終には社會革命が、新しい生產關係に適合した新しい社會制度を齎らすようになる。マルクスの著書を見るとこゝばかりではなく他の處にあつても、マルクスが此の點に關して甚しく具體的な狀態を考へてゐたことが明である。彼の見解に從ふと、辯證法的手段に依つて資本主義は當然社會主義に導いて行く筈のものである。しかもその理由は次のやうなものである。益々分岐して行く分業や又大工業のために、今日生產方法が一種の社會主義的なものになつてしまつてゐるが、所有關係は資本主義が社會の生產を獨占してゐるので、相變らず個人的の儘で殘つてゐる。つまりこゝに物質的な基礎工事（社會の生產）と概念的な上層工事（個人的な占有方法）との間に矛盾が起る。

搾取される勞働者が搾取する資本家に對抗する戰は、此の矛盾が消滅し、占有方法が社會的になつてしまふ迄、即ち生產手段が社會化され利益が社會的に分配されるやうになる迄は、靜止する處を知らないであらう。

これを約言すると、マルクスの史的唯物論は結局次の事を述べてゐるのだ。最初に存在してゐた唯一のものは物質である。不斷の辯證法的發達を遂げて行く內に、この物質は人間の精神の中で、その最高の形を取るに至つた。しかし人間のあらゆる思索や行爲、凡ての政治や社會や法律上の施設は、窮極に於て物質的生產狀態が決定するのであるから、人間の精神は常に物質に結びつけられてゐるものである。人間の意志は自由にその道を選ぶのではなく、彼には無關係な內在的法則に從つて必然的に動いて行くものである。歷史中に於て辯證法上の常に前進して行く要素は、階級鬪爭であり、辯證法的事件の最後の目的は、無階級の社會である。これが實現されると、本當の人間史が始まるのであつて、それ以前のものは凡て、序史であつたのだ。

こうなると吾等は、マルクスがその築き上げた歷史の理論を、歷史的に證明してくれることを期待せずにはゐられない。處が彼はその代りに、資本主義的生產方法が、封建社會から發達したもので、當然社會主義に近づき迫つて行くものであることを示すだけで滿足してゐる。

マルクスに從ふと、封建社會から資本主義への變遷は、大體次のやうに完成したのである。即ち、

中世紀時代には農民は生産機關即ち土地の幾分を持つてゐた。領主は農奴又は奴僕に幾分かの土地を交付して耕作させたその代り是等の人々は、それ以外の領主の土地をも無償で耕作しなければならなかつた。自己に任せられた土地に就いては、耕作者はその本來の所有主ではないが、しかしその用益權を持つてゐた。そこで土地なるものは、或意味に於ては、全封建治下の共有財産であつた。處が十四世紀の末葉からフランデルン Flandern に於て羊毛工業が勃興したので、封建領主は田畑にしてゐた自己の土地を、牧羊場に變更し始めた。此の手段は英國經濟史上では「エンクロシュアー」(Enclosures)「圍墻(かこひこゐ)」と云ふ名で知られてゐる。しかし領主等は自分自身の耕作地を墻で取圍むだけでは滿足せずに、奴僕の土地までも沒收した。是は或意味に於ては已むを得ぬ事であつた。何となれば其等の土地は領主の田畑の間に介在してゐたのだから其を沒收しなければ墻を繞らすことが不可能であつたからである。中世時代には其外に尙澤山の共有地があつて、村人は誰でも其處に放牧する權利を持つてゐる。然るに此土地も領主の貪慾の犧牲となつた。そればかりでなく、領主は小百姓の小屋を破壞して彼等を其領地外に放逐した。之がため乞食のプロレタリアを生じ、彼等は各都市に離散して其全地方を不安にした。それが又英國革命に當り、教會領を沒收し、其土地を耕作してゐた多數の百姓の財産をも奪つた爲め、無産プロレタリアの數は一層增加した。是が農業資本化の第一歩であつた。

中世紀には都市に於ても同じ様な事が起つた。中世時代には職人の組合や團體が、工藝的生産を支配してゐた。職人組合員以外の者は、何人も其都市に於て手工業を營むことが出來なかつたし、又外來者は其職人組合に加入することが出來なかつた。そこで自分の土地から放逐されて都市内に逃げ込んだ者は、此の嚴然たる制度に遭つて、仕事に從事することなどは不可能であつた。都市には又多數の商人がゐた。彼等はいつとは無しに巨富を蓄積してゐたので、これを有利に働かせようと考へてゐた。そこへ避難者が流れ込んで來たことは、頗る好都合であつたので、彼等はそれらの人々に職業を與へ、組合と競爭して工藝品を製作させることを始めた。そこで組合は防護戰を始め、外來人が其都市内に滯在することを禁じようとした。けれども金權に對しては何程も事が運ばなかつた。富豪は大抵其使用人を都市の郊外又は時には森林中の空地にさへ移住せしめた。之がため手工業界には非常に苦しい競爭の時代が現出し、結局これは降參しなければならなかつた。親方の内微力な者は競爭に堪へ難くなつて新興の會社に加入し、或は從來の如く直接顧客の注文に應じて製造する代りに資本家のために働くようになつた。他の資力ある親方等は、使用人の數を増し、營業を擴張し、かくてこれが中世時代の境遇を遙に越える勢力に達するや否や、自ら資本家となつてしまつた。こうして小さい獨立手工業者は漸次消滅し、大規模の經營者だけが殘存して、以前の獨立手工業者等は資本家のために働くやうになつた。これで資本主義への轉向は完成されたが、マルク

スに依れば、これはまだ資本主義の初歩段階に過ぎなかつた。即ち勞働者は生産機關より離れて資本家の使用人となつた。資本家は生産機關を獨占し、勞働者を使用して自己の資本を有益に働かせる、と云ふのはつまり增殖をはかつた。これが實現されたに就ては、勞働者は先づ自由になつてゐなければならなかつた。しかも二重の意味に於てゞあつた。即ち地主と職人組合の强制規約とから自由になると共に、その所有物を收奪されることに依つて生産機關からも自由になつてゐなければならなかつた。此の過程に際しては、殘忍と暴力とが資本家側から利用せられたことは、中世紀の末葉から前世紀の二十年頃に至る間英國の農夫が無法に放逐されたことが示してゐる通りである。マルクスはその特有の力强い、しかし甚しく誇張した形で次のやうに言つてゐる、『資本主義の生産方法の永遠の自然律を展開せしめて勞働者と勞働條件との分離行程を完成し、一方の局に於ては、社會的の生産機關及び生活資料を資本に轉化せしめ、他方の局に於ては民衆を賃金勞働者、即ち近世史の人爲的産物たる自由な「勞働貧民」に轉化せしめるためには非常な努力を要したのである。」若しオーヂエー Augier (7) の云ふ如く貨幣が「一方の頰に生來の血痕を帶びて此世に來つた」もの、であるとするならば、資本は頭の天邊から足の爪尖に至る總べての毛孔から血と汚物とを滴らしつゝ此世に來つたものと云ひ得るのである(8)』と。」

(7) Du Crédit public

(8) Karl Marx: Das Kapital, 10. Auflage, Hamburg 1922, I. Bd. S. 725f. 譯文は高島素之氏譯　改造社版
昭和五年發行　資本論に依る。以下之に倣ふ。

或は別の所でマルクスは「暴力なるものは舊社會が、新しい一つの社會を孕むに至つた場合の其の産婆である。其れは一つの經濟力である(9)」と云つてゐる。(9)

(9) Das Kapital; I. Bd, S. 716. 譯文同前　以下之に倣ふ。

資本主義生産方法への條件が備つて後は、言ひ換へると一方に於ては純所有者、他の一方に於ては純勞働者が出來上つて後は、資本主義の發展は「内在的必然律」に從ひ著々進歩することが出來た。手工業からは協業が發達し、協業からは製造所が、製造所からは蒸汽機關の發明によつて大工業が發達した。大工業は自然力を虐使し豫想を超越して生産を増大したが、人間の勞力をも物質化した。更に悪い事は、勞働者の過剰を來した事である。資本の利用と競爭とは、資本家を驅つて、増々生産の増加や、改良された新機械の採用や、製造物品の低價に走らしめた。勞働者は増々過剰となり、其の生活は愈よ悲慘となつた。終に勞働者は壓迫者に對して激烈なる戰鬪を開始すべく結束した。

大生産者が競爭してゐる間には、小生産者は滅落し、無産者の數は絶えず増加し、生産機關は僅少の大資本家の手中に握られて行く。そこで、マルクスに依ると、社會が資本主義組織の最終點に

至るのは、最早やほんの一歩の差に過ぎないと云ふ。『此の轉化行程に伴ふ一切の利益を横奪獨占する大資本家の數が増々減少すると同時に、窮乏や、壓迫や、隷從や、隷頽や、搾取などの量が益々増大して來る。が、それと共に又、資本主義生産行程それ自身の機構によつて訓練、統合、組織されたところの、不斷に膨大しつゝある勞働者階級の反抗が増進する。資本獨占は、それ有るがために、又そのお蔭で開花繁榮した生産方法の桎梏となる。生産機關の集中と勞働の社會化とは、その資本主義の外包と兩立し難き點に達する。資本主義の外包は破裂する。資本主義的私有時代に終焉を告げる鐘が鳴る。收奪者は收奪される。』

『資本主義の生産方法から生じた資本主義的專有方法、つまり資本主義の私有財産制は各個人の自己の勞働の上に築かれたる私有財産の第一の否定である。併し、資本主義の生産は、一つの自然行程として必然的に己れ自身の否定を造り出す。此の否定は、私有財産を再び成立せしめるものではない。けれども、資本主義時代の獲得物、即ち協業や土地の協有や、勞働自身によつて生産された生産機關と云ふ樣なものを基礎とする各個人の財産を成立せしめるであらう。』

『各個人の自家勞働に立脚した分散的私有が、資本主義私有へ轉化して行つた事は、これを、實際的に既に社會的生産經營を基礎としてゐる資本主義所有が、社會的所有へ轉化することに比すれば、比較にならぬ程長期を要し、圓滑を缺き、しかも困難な一行程である事は云ふまでもない。前

者に於ては、少數横領者に依る民衆からの收奪が問題であり、後者に於ては民衆に依る少數横領者からの收奪が問題であるがためである。(10)』

(10) Das Kapital; I. Bd. S. 234.

これが、マルクスが其の「資本論」中に敍述してゐる資本主義生產方法の歷史的及び唯物的發展過程の概略である。此の經過はマルクスに依ると必然的のものであつて、資本主義に內在する法則に從つて完成する。故にマルクスは資本家が勞働者を「搾取」する事を毫も非難しない。資本家は此點に於ては唯必然的な發展法則に從つてゐるに過ぎない。何となれば「自由競爭は、個々の資本家に對して資本主義生產の內在法を、外部的强制法則としての效力を有せしめる」がためである(11)

(11) Das Kapital: I. Bd. S. 233.

批判

マルクスの歷史觀に對しては、何と考へるべきであらうか。人間の思考や行爲は、凡て經濟上の關係に規約されてゐると云ふのは、正しいであらうか、人間は此の點に關しては絕對的な內在法則に支配されてゐるのであらうか、又は自由意志の決する處に從つて前進して行くのであらうか。人間の精神とは、物質の高等なる發展形式に過ぎないであらうか。此の歷史哲學を全體として考へる

ならば、吾等は斷固たる否定を以て應酬しなければならぬ。第一の謬見は人間の精神を物質の高等なる發展形式に外ならないとしてゐる事である。寧ろ人間は二つの本源（Prinzip）即ち、一つは物質たる肉體、もう一つは精神たる靈魂より成立つてゐる。人間の精神は物質に從屬することもあるが、他の一方に於ては多くの場合、物質關係をその精神的自由意志に從つて形成する事は其の力の儘である。又一切の歴史的事件が經濟事情に支配せられると主張する事も不可である。誰が基督教は古代羅馬の經濟事情の産物であると主張し得るであらうか。之に反して基督教の歴史を知つてゐる者は、基督教は三百年の戰に依つて羅馬帝國の世俗勢力と絶縁しなければならなかつた事や、今日に至るも尙敵意を懷く勢力との戰を續けてゐなければならない事を、認めるであらう。基督教は物質的のものとはまるで其の趣を異にし、人間と成り給へる神の子たる救世主の宗教理念より生れ出でた靈的神的の力である。物質などではなく、永遠の精神こそ眞に强力なるものであることは、歴史の上に、基督教が二千年來幾多の勝利をかち得た事實が證明してゐるそればかりではなく、人間の精神、更に明らかに言へば、人間の意志は、屢々歴史の發展に方向を與へてゐる。フランス大革命中の、及び其の直後の、佛國と歐洲諸强國との戰は、野心滿々たるナポレオンと云ふ非凡な人格が無かつたならば、多分全く起らずに濟んだであらう、又は別な方向に進んだ事は確であらう。」歴史的發展なるものは確に存在する、又經濟關係が其の中に重大な役割を演ずる事も有り得るであ

らう。けれども人間の意志は此の發展中に決定的に干與して行くもので無いと主張する事は、甚しく謬つてゐる。火藥及び印刷術の發明は、中世紀末の生産條件の當然の結果であるなどと誰が主張し得るであらうか。又、斯の如き重大なる發明が、當時の及び其の後の凡ての時代の政治的及び智的生活に深酷なる影響を與へた事を、誰が否定し得るであらうか。これと同様な事は、世界史中の偉人の爲した大發明や發見や大規模の企業等にも、該當する。從つて假令經濟關係が多少共重大なる役割を演じてゐるにしても、主要事に於て歴史を造る者は偉人である事をマルクスに對して正しく主張し得るのである。

資本主義成立に對するマルクスの説明は、最小限度に見ても偏見であり不充分である。英國に於ける教會領の圍墻(かこひこみ)や廢止は疑ふ餘地もなく、多數の百姓から生業を奪つてしまつた。併し其處に無産者の成立に對する最後の説明を求めることは、容認する事の出來ない誇張である。第一圍墻れたのは英國の最小部分の土地に過ぎなかつた。從つて追はれた百姓の數は比較的に少なかつたのである。其の上、シンクホヴィッチ教授に依ると、中世紀末頃の英國の農業は頗る凶作續き（土地疲弊の結果）であつたので、一面に於ては農奴達に殆んど生計の道が絶えてゐたし、他面に於ては耕作地を牧羊場に變へることは、領主に取つては、經濟上の喫緊事であつたのだ。マルクスの説明が英國に對してはまさに肯綮に當つてゐると考へても、これは其の他の國々に於ける資本主義の成立に

對する例證としては殆ど通用しないのである。何となれば、農業の發達が全然違つた經過を取つてゐるからである。

マルクスが資本主義の本質的條件として、一方に純所有者の存在を、他方に純勞働者の存在を見た事は、疑も無く正しい。けれども純勞働者の成立に對する彼の説明は、不充分である。ゾムバルト Sombart は此の問題を詳細に研究した人であるが、無産者の成立に對する原因として大略次の樣な原因を擧げてゐる。迅速なる人口の增加、獨立生產者の貧窮、賣行の停滯奴隷の中止（英國では既に十四世紀中に始つてゐる）家來の廢止、戰爭の慘禍（殊に佛國及び獨逸に於て）、それから最後には重商主義に依る貨幣資本力の增加。(12)

(12) Werner Sombart: Der moderne Kapitalismus 2. Auflage Berlin Leipzig 1916, Bd. I, S. 792 ff.

これ等の原因の中最も重大なるものは、疑も無く人口過剩と貨幣資本力の增大である。一方に於ては迅速に增加して行く子孫の爲に生計の道を開かなければならないし、他の一方に於ては僅少なる貨幣貴族が、今日資本主義と名付けられてゐる所の生產の運用に依つて、之等を造り出す力を持つてゐる。十五六世紀中の非常なる發見や海外貿易、殖民政策貴金屬品の激しい昂騰、十七八世紀中に於ける科學、殊に自然科學の未曾有の進步、及び偉大なる發明者に依つて其れが技術の爲に實際化されて行つた事は、假令それで始めて可能になつたのではなくとも、生產の運用行程は、夥し

い利益を受け、且又大いに促進されて行つた。第十九世紀の始からは科學と技術との進歩は、高度資本主義と云ふ經濟上の驚異が實現された程の階程とテムポとを發揮するに至つた。しかも之が歴史始まつて以來最初の事なのである。

マルクスの資本主義成立史に對する吾等の最後的判斷は、既に上述の如く、それは偏見であり、不充分である事、事實を誇張してゐる事、重大事を見落してゐること乃至見逃してゐる事、從つて彼の敍述が單に人類史上の經濟時代のみを取扱つてゐるに過ぎない點を、除外するならば、彼の歴史的發展法則は何れにしても證明されてはゐない、と云ふのである。資本主義が社會主義に移る發展に關する彼の議論は、要するに彼の價値論及び剰餘價値論に基いてゐる事であるから、これは適當な場所に於て詳論する事としよう。」

第三章　階級闘爭

大要

マルクスは「共産黨宣言」殊に「經濟學批判」(二二頁參照)の序説中に於て物質の生産條件が一切の人類史の基礎であつて、人間は其の理念に依つて一定されるものではなく、あらゆる人間の思想は、其の歴史時代に該當せる經濟關係、又は生産樣式の所産に過ぎないと説明してゐる。物質が唯

一の實在物であり且唯一の重要事であるが故に、人間の一切の思考及び努力は、自己の物質的存在を確實にする事、乃至は更によくする事に向けられたのである。言葉を換へて言へば、人間のあらゆる行爲の窮極の原動力は經濟的私益である。併し個人のみならず又、社會團體の利益も屢々相互に衝突するに至る事は自明の理であつて、これが闘爭及び社會的軋轢を惹き起す原因となる。經濟的强者は、常に經濟的弱者を壓迫搾取し、時には慘忍なる暴力をすら使用し、殊に甚しきは、自己の都合の爲には國家の力をすら利用するものである。其處で此の狀態が愈々堪へ難く成つて來ると、弱者等は自ら一つの階級を結成し、社會的及び政治的變革に依て舊社會の組織を破壞し、自ら支配階級と成るに至る。從てマルクスは、階級闘爭が歴史中に於ける動因であり、活力であり、辯證法的原因であると主張し得ると考へたばかりではなく、更に進んで「從來のあらゆる社會史は階級闘爭の歴史である」(1)とまで言つてゐる。此の階級闘爭思想は、マルクスの凡ての著書の中、殊に一資本論」中に、再三實際的に述べられてゐる。

(1) Manifesto of the Communist Party, authorized English translation. New York 1903, P. 8.

エンゲルスは、當時に於ける階級闘爭思想の擴大して行く意義及び同時にマルクスの歴史理論の正確な形に就いて興味ある説明を與へてゐる。彼は言ふ『自然觀の何かが急變するのは、研究の結果として變更せざるを得ないやうな積極的な認識材料が提供される事に依て、始めて可能に成る程

度のものであるが、歴史的事實は、既に遙かな以前に歴史の解釋に決定的な方向轉換を與へてしまつてゐるのである。一八三一年にはリオンに於て勞働者の最初の蹶起があつた。一八三八年から四二年にかけては、最初の國際的勞働運動、即ち英國の社會民主主義勞働運動（Chartist）がその絶頂に達した。プロレタリアとブルヂョオアとの階級鬪爭は、一度、一方には大工業、他の一方には新しく制し得たブルヂョア政治が發達して行つたと同じ程度に於て、進歩した歐洲諸國の歴史の前面に現れて來た。資本と勞働との利益の一致を說き、自由競爭が一般の調和と國民の安寧を齎らすと說くブルヂオア經濟學說は、事實が、次から次へとその虛構の說たる事を激しく難詰した。頗る不完全ではあるが、それを理論的に表現したところの佛蘭西及び英國に於ける社會主義と同樣に、最早それ等のことを無視することは出來なかつたのである……『新事實は今日迄の全歴史を新しい檢討の下に据えることを强要した。その結果、原始狀態を除いては、今日までの凡ての歴史は、階級鬪爭の歴史であつた事、相互に鬪爭する社會階級は常に生產及び交通關係の所產であつた事、一言にして盡せば其の時代の經濟事情の所產であつたこと、即ち社會の各時代に於ける經濟機構が眞實の根底を形成してゐたもので、これに依つて各歴史時代に於ける法律上及び政治上の機關の外、宗教、哲學及びその他の思想現象に至る迄の全上層建築は、最終の說明を得るものである事が明らかになつて來た。……從つて今では社會主義は、最早一人の天才的頭腦が遇然的に發見した事では無く、

歴史的に形成された二つの階級、即ちプロレタリアとブルヂョオアの闘争の必然の歸結として現れて來たのだ。』(2)

(2) Friedrich Engels: Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft, sechste Auflage, Berlin 1919, S. 32-33.

此の引用文を見れば、マルクス及びエンゲルスは、階級闘争を以て人類史上に於ける原動要素となし、從て資本と勞働間の闘争は世界的意義を持つもの、としてゐる事は最早疑ふ餘地がない。」

論證

マルクスは自己の命題を如何に論證したであらうか。原始社會から彼の時代に至る迄の階級闘争に關し、彼は一度も歴史的敍述をした事がない。彼の在世當時、幾多の階級闘争が行はれてゐたであらうことは誰でも想見し得ることではあるが、唯それだけの事を以てマルクスは早計にも、人類史は階級闘争の歴史に外ならぬと斷定した。斯く最初から斷定を造り上げ、然る後に之を證明せんとしてマルクスは次のやうに述べてゐる。

『(希臘)の自由民と奴隷、(羅馬の)貴族と平民、(中世の)領主と農奴、同業組合の親方と職人、簡單に言へば壓制する者と壓制せらるゝ者とは古來常に相反目して、或は隱然の、或は公然の、絶ゆ

ることなき闘爭――それは何時も全社會の革命的變革を以て、又は相爭ひつゝある諸階級の共倒れを以て、其局を結ぶに至る所の一の闘爭――を續けてゐる。昔の時代の歴史を繙けば、吾々は殆ど到る所に於て、全社會が種々なる身分に編成され、社會的地位に多樣の等差あることを發見するであらう。古代羅馬に於ては、貴族、騎士、平民、奴隷があり、中世に於ては封建諸候、家臣、同業組合の親方、職人、農奴があり、且つ此等のものゝ殆ど各々に於て、更に猶それ〴〵の等級があつた。(3)』

(3) Manifesto of the Communist Party, P. 8. 譯文は河上肇氏著「唯物史觀研究」より

「資本論」中に於てはマルクスは、古代及び中世の階級闘爭を、更に細目に亘つて述べてゐる。曰く『例へば古代の希臘及び羅馬に於ける階級闘爭は、主として債權者對債務者の抗爭として現はれた。又、中世に於ては、それは封建債務者の沒落を以て終つた。彼等はその經濟的基礎と共に、政治上の權力をも失つてしまつたのである。(4)』

(4) Das Kapital, Bd. I, 3. Kapitel, 3b.

明確を缺く論證

右の如く、マルクスは史上幾多の闘爭を敍述して居るのは事實だが、彼が以上の闘爭を悉く「階

級闘爭」と呼んだのは、餘りに過言であると言はねばならぬ。何故ならば、右の闘爭の多くは、近代社會に於ける資本家對無產者の闘爭とは、その性質を全然異にして居る。例へば、マルクスは史上の階級闘爭を列擧するに當り、中世の「身分」Stände を、單に「階級」Klasse と呼んでゐるが、これらの如きは用語と實際との關係を無視した暴言である。又、羅馬の貴族と平民の闘爭も、マルクスの解する如く、經濟的性質の階級闘爭ではなく、政權爭奪の戰ひであつた。奴隷制度も、殆ど凡ての場合に於て、一國家內の諸階級間に於ける經濟的闘爭の所產ではなく、異邦間の戰爭の結果生じたものである。勿論此の異邦間の戰爭の起因は屢々經濟的考慮にあつたことは、我々も亦否定する者ではないが、戰爭の原因は國際的性質を帶び、國內的階級間の嫉視反目の現れではなかつた。

時として階級闘爭の性質を有する內亂も勃發したが、此の種の內亂は原則ではなく、寧ろ例外に過ぎなかつた。マルクスは、人と人との間に於ける一切の戰は、悉く階級闘爭であるとの自說を證明せんとする餘り、國民的戰爭をも階級闘爭と斷じ去ることを躊躇しなかつた。彼の著書「フランスに於ける內亂」に曰く『古代社會が遂行することが出來た至高の英雄的努力は、國民的戰爭であつた。然るに今日に於ては、此の國民的戰爭も、政府當局が階級闘爭を遲延せしめようとの唯一の目的を以て行ふ單なる恫喝に過ぎぬ。此の種の戰爭も、階級闘爭が發展して內亂となるや否や、直ちに終局を告げるに至る。一切の國民政府は互に協力して無產階級を彈壓するに至る故、支配階級は、

最早國民的一體の外衣の下にその眞意圖を隱蔽することは不可能となる。』(5)

(5) Civil War in France, 1876, P. 53, bei Werner Sombart, in: Der proletarische Sozialismus, Bd. I, S. 378.

然し乍ら、マルクスは、當時に於ける階級鬪爭が、前時代のそれと大いに異つて居る事實を充分承知して居たのである。「共產黨宣言」に曰く、

『けれども今の時代、有產者團の時代は、その階級の對立を簡單化せることを以て特徵づけられて居る、全社會は愈々益々二個の敵視せる二大陣營に、互に間近く對峙せる二大階級に、卽ち有產者團と無產者團とに分裂しつゝある。(6)』

(6) Manifesto…P. 9. 譯文前揭註(3)に同じ

若しマルクスが『總て從來の歷史は階級鬪爭の歷史に過ぎぬ』との所論を證明せんと欲するならば、先づ此等階級鬪爭を充分歷史的に敍述すべきである。然るに我々が「昔の時代の歷史」に關しマルクスから聽くを得るのは、單なる槪括的論斷に過ぎない。エンゲルスはこれに脚註を附してマルクスの階級鬪爭理論を緩和し、嚴密に言へばそれは唯文書に記錄されたものとしての歷史に適合するのみで、原始社會に關しては我々は殆ど何等の知識をも持たぬと述べて居る。ハックスタウゼンHaxthauen及びマウレルMaurerの研究に基き、エンゲルスは原始社會に於ては、一切の土地は共有に屬して居たとの見解を採り、此種の原始共產主義が姿を消すや、人類社會は互に鬪爭する各種

階級に分裂するに至つたと考へてゐるが、併しマルクスは此の階級闘爭そのものに就いては、僅少な説明しか與へてゐない。我々が古代社會に關し聽き得るのは『古代羅馬に於ては、貴族、平民、騎士、奴隷があり、中世に於ては、封建諸候、家臣、同業組合の親方、職人、農奴があり、且つ此等の階級の各々に於て、更に猶夫々の等級があつた』と言ふことだけである。マルクスが歴史の大部分に關し敍述する所は以上に盡きて居る。彼は、如何にして羅馬の貴族が一切の政權掌握に成功したか、及び、如何にして中世の農奴が現出するに至つたかに關しては、一言も觸れて居ない。彼は單に中世の社會制度を事實と認め、之を出發點とし、壓制された農奴階級が如何にして遂に封建的「階級」の支配から自己を解放することに成功し、更に進んで封建制度そのものを崩壞せしめて自ら支配階級となるに至つたかを示さんと試みた。

マルクスの階級闘爭理論に依れば、社會的變革を齎らすものは、常に弱者の「階級」であると言ふが、これは一言注意しておく必要があらう。果してマルクスの言の如しとせば、彼は、中世に於ける貴族階級が如何にして自ら支配階級となり得たかを説明すべきであつたが、此の點に就ては彼は何等言ふ所がない。何故マルクスが中世後期の歴史に於て、弱者「階級」が勝利を得たことを説いたかと云ふに、彼は次に、ブルヂオア時代に於ける弱者「階級」たる無産者階級が資本主義を打倒し、社會的基礎の上に生産組織を改造することに依つて社會的優越を獲得する事を主張せんとし

て居たからである。無産階級の革命に依る經濟的、政治的秩序の變革を待望して居た故に、マルクスはその理論の證明を歴史に求めた。當時、階級的確執及び階級闘爭を目擊して居た彼は、若しその理論が普遍的眞理であるならば、當時の社會に於ける階級闘爭と同樣のことが、過去の時代に就ても言はれねばならぬと考へたのである。

マルクスが資本主義制度發展の理由として列擧する所は、彼の唯物史觀とは殆ど相容れぬもの許りである。資本主義發展の理由の主なるものとして、マルクスは、米大陸の發見及び東印度への新航路の發見を擧げ、此の結果、生産、外國貿易及び海運は、大いに促進せられるに至つたと述べて居る。新市場の開拓及び原料品の新たな供給があれば、生産及び交換が促進されることは明であるが十五世紀の大發見が、何故に中世生産樣式の必然的結果として達成されたかを知ることは、極めて困難である。寧ろこれは僥倖の吻合と言つた方がいゝのではなからうか。コロンブス並びにヴァスコ・ダ・ガマの探險が若し失敗に終つたとすれば、歐洲經濟史の發展は、現在あるが如きものとは大いに相違してゐるであらう。又兩者の探險の動機は、新市場を發見しようとの希望ではなく單に異境を掠奪搾取せんとするに在つた、と言ふことも出來ない。乃至果敢な如上の探險家が、悉く被壓迫「階級」に屬して居たのではなく、彼等の大多數は寧ろ貴族「階級」の出であつた。中世イタリー共和諸國に於ては、新大陸の發見以前既に金權貴族制度が發達してゐたが、近世資本主義

の初期乃至その後、資本主義制度を創設した大多數の者は「ブルヂオア」階級に屬せず、寧ろ此の金權貴族階級の所屬者であつた。封建制度が遂に壞滅するや、貴族階級の所屬者の多數は資本家となり、富裕なブルヂオアも亦此の貴族階級の陣營に參加し、古き貴族制度は一大變化を受けるに至つたのである。

資本主義社會以前の時代に於ても、社會的鬪爭は存在してゐたが、その數は比較的に少く、又マルクスの言とは異なり、その鬪爭は經濟的性質のものに限らなかつた。グスターフ・シュモラーに依れば、中世の農奴と封建諸侯との間には、殆んど鬪爭を列擧して居るが、それはマルクスの所謂階級鬪爭とは大いに趣を異にして居る。曰く

『九世紀、サクソニーに起つたシュテリンゲル族の暴動は外來のフランク族の統治並びに基督教に對する抗爭である。十一世紀に於るノルマンヂー農民の貴族階級に對する鬪爭は、外來侵略者の高慢な支配に對する謀叛である。一二〇七年及び一二三〇年のシテヂング農民の一揆は、聖職者の施政並びに教權の濫用に對する抗議である。一三五八年のフランスに起つたジャッカリー、及び一三八一年、ワット・タイラーの指揮下に起つた英國農民の騷擾は、封建君侯が英佛戰爭に乘じて租稅の負擔を著しく增大し、下層階級の生活狀態を堪へ難いものとした結果、農民が此等封建君侯に對し血みどろの抗爭をなしたものである。(7)』

(7) Gustav Schmoller: Die soziale Frage, 1918, S. 545

更に同氏に依れば、中世都市の發展は主として平和的であつたので、それに彼等が階級闘爭の手段に訴へて、その權利特權を獲得したと主張する如きは、甚しい誇張であると云ふ。(8)

(8) 同前 S. 549

マルクス階級闘爭理論の心理的解剖

以上に徴すれば、階級闘爭を以て人類史の原動力であるとするマルクスの理論は誇張に失して居ると斷じていゝ。カール・マルクスの如き優れた頭腦の所有者が、此の様な非科學的な理論に迷ひ込んだと云ふことは、寧ろ不思議である。しかしこれはマルクスの心境を畫き出せば自ら明かとなるヴェルナー・ゾムバルトに依れば、マルクスは、社會の事物一切並びに凡ての人に對し極めて深刻な憎惡を抱いてゐたと言ふ。マルクスは、心身ともに病的な家庭の一員であつたので、異常に強烈な抽象的頭腦の所有者であつたと同時に、飽くなき權勢慾に滿たされて居た。その上、彼は極端な情熱的性質で、極めて傲岸不遜な野心家であり、且つ非常に怒り易かつた。彼はその抽象的頭腦に災され、直接人生と接觸せず、一切の知識はこれを書籍から抽き出した。故に、彼の著手した實際的な仕事は殆んど全部失敗に歸した。然も彼はその失敗を、却て周圍の環境に罪があるとした。か

くして彼は胸中、憎悪、憤懣、怨恨に堪へなかつたのである。彼は敵を憎み、競爭者に對しては羨望と嫉妬の念に驅られ、自身の門下を遇するに傲岸不遜の態度を以てし、一般人に對しては深酷な輕侮の念を抱いてゐた。そのためにマルクスは極めて少數の知己しか惠まれず、親交を結んでゐた人々をも直ちに敵視し、これに思ひ切つた惡罵を浴びせると云ふ當然の結果を招來した。彼の生涯の伴侶であつたフリードリッヒ・エンゲルスすらも對等の立場に於ける交渉がマルクスとの間に生じた場合には、常にマルクスの精神的缺陷を見せつけられてゐた。

然しマルクスの最も著しい特徴と言ふべきものは、世上一切の人、萬般の事物を批判した彼の情熱である。彼の著作の大部分は、例へば「ヘーゲル法律哲學批判」「經濟學批判」の如き批判書か、乃至「反プルードン」「反デューリング」「反バクーニン」等の如き論難の冊子である。彼の批判は苛酷であり、論難は辛辣であり、行文は毒舌的であつた。彼に依ると、常に『善き半面を打つて勝利を得るものは惡しき半面にして、これが歴史を構成す(9)』と云ふ。彼はこれ程常に悲觀論に傾いてゐた。

(9) Das Elend der Philosophie, Berlin u. Stuttgart 1923, S. 105.

マルクスの胸中には一片の愛國心も存せず、その一切の述作に於て、極めて強い反獨逸感情を吐露した。特に彼が自分の革命思想に對する宿敵と看做してゐたプロシヤには、特殊の憎惡の念を抱

いてゐた。マルクスは權勢を熱望した。然し彼の非實際的頭腦、及び平衡を失つた性情の故に、彼は事實上權勢の地位に榮達することを得なかつた。此の失敗により、彼は內心頗る不滿を感じ、遂に彼の權勢への憧れを、大衆の低劣なる本能に呼びかけることに依て滿足せしめようとしたのである。

ゾムバルトは上述の如く、マルクスの人格を忌憚なく解剖したる後、此の點に關して、「テコー(Lieutenant Techow)の左の如き言葉を引用してゐる、

『憎むべき現存權力を支配圈から驅逐せんが爲に、彼はプロレタリアの內にのみ發見し得た一つの力を利用したのだ。故に彼はその體系をプロレタリアに該當せしめた。余は、マルクス自身は再三その然らざる所以を保證して居るにも拘らず、否恐らくその故にこそ、彼の一切の言動の目的は、彼自身の個人的支配に在るのだ、との印象を受けたのである。(10)』

(10) Werner Sombart: Der proletarische Sozialismus, Bd.I, P. 74.

茲で特に注意を要するのは、以上の引用句は、前世紀の五十年代のものであること、即ちマルクスの全盛時に言はれたものであるといふ事實である。」

再びマルクスの階級闘爭理論に立歸らう。マルクスが「從來の歴史は總べて階級闘爭の歴史である」として、大いに此の理論を誇張してゐることは前述した所であるが、今やマルクスの心境に關し一層の理解を得た我々は、マルクスが、明瞭に曲解に過ぎぬ史觀をかくも重要視した理由を、容易に看取し得るのである。即ちこの史觀が、無產大衆の間に憎惡の種を播く道具となるからであつた。此の點に關し、ゾムバルトの言ふ所を聞かう。

『我々の研究により、マルクスが階級理論を極端に强調した結果、遂に階級闘爭の理論を不合理なものにして了つた、換言すれば、社會組織に關する理論的表現としての階級闘爭理論の深長な意義を、全然空無に歸せしめた、と云ふ事が判つた。然し、我々は、マルクスが一面に於て階級闘爭理論の意義を沒却したが、他の一面に於て充分その埋合せをつけてゐることを觀過してはならない。』

即ち階級闘爭理論は、マルクスによつて極端に誇張されたため、その合理的な實質に損傷を蒙つたが、一面マルクスの手で不合理的素因を附加へられた結果、力に於て獲得する處があつたのである。これが傳來の階級闘爭理論に對してマルクスの寄與した獨自のものである。即ち彼は倫理的、神祕的內容を以て、階級闘爭理論を飽和の狀態に至らしめたのである、マルクスは此の理論から一つの容器を作り上げ、その中へ恐ろしく多量の否定的激情を集積した。階級闘爭の全理念はマルクスにとつて、結局階級憎惡を引き起こすに役立つたにすぎぬ。マルクスが世の一切を憎惡したる如く、

他の人々も悉く飽く迄憎惡しなければならぬ。……此の激烈な人物を心理的に解剖した結果、如何に夥しい憎惡が彼の胸裡に座を占めてゐたかを知つた。そこでこの超人的大憎惡を、一般の世界の内包、歴史の精神にしたいのであるが、此の目的に役立だせられたのものが、即ち階級鬪爭理論である。科學の假面の金箔を以て裝飾された貧弱な合理的手段。卒直な悟性の前に於ては、この理論が無意義であらうとも淺間しくあらうとも、それが一體何だと云ふのだ。憎惡を世界に弘布すべきその機能を、充全しさへすればそれでよいのだ。ロンドンで建築職工の同盟罷業が起つた際、マルクスはかう書いてゐる——我々は本來雇傭者側と爭ふ何の理由も持つてゐない。然し、集中された意識的な階級的憎惡を發生せしめんがために出來るだけ努力せよ。此の憎惡こそ社會變革への最も確な保證なのだ。(A)』

(A) "Das Volk," London 1859, Nr 15-zitiert bei Prinz, 18

『而して、マルクスは世界に於ける無產者の立場を次の如く斷言した。曰く——都市及び農村の無產者は富裕階級に對し、トーリー黨員と共通の憎惡を招き、貴族階級に對しては、市民階級と憎惡を共にする。ホイッック黨員に於ては貴族階級、市民階級の兩者を憎む。……彼等に於ては英國を支配する寡頭政治(B)を憎む(11)』

(B) Gesammelte Schriften I(1917), 6.

(11) Werner Sombart: Der proletarische Sozialismus, Bd. I, S. 382-83.

ゾムバルトは、マルクスが、地上一切のものに對する自己の憎惡、嫉妬及び不滿をつぎ込むべき相手を求めてゐたこと、而して、彼が、遂に無產者階級が最も此の目的に適してゐるのを見出すに至る迄の經過を示した。當時の被搾取階級であつた無產者が、自己の境遇に對する憎惡不滿の念に充たされてゐた事實をマルクスは熟知してゐた。そこで彼のなすべき事は、彼等の憎惡に新な食糧を提供し更により効果的たらしめる爲に、此の憎惡に科學の「後光」を附加すればもうそれでよかつたのである。

然し、人は、憎惡によつて生くるものではない。且つ、又、多數大衆は、全く消極的感情のみから成る政策を抱懷する指導者に、追隨するものではない。若しマルクスが無產者階級の有力な運動を開始せんとするならば、忠實な追隨者に對し、その報償として「約束の國」を提示しなければならぬ。階級闘爭は、それ自身に存在の理由があるのではない。光榮の彼岸、即ち自由と幸福と潤澤の時世、搾取と勤勞と階級對立とから釋放された時世、最早社會的階級の存在しない時世への到達の手段に過ぎぬ、斯くの如き黃金時代が到來せば、人類は互に同胞の如く平和裡に生を樂み、生產手段を共有し、各人の必要に應じ業蹟に應じて、相互の勞働の果實を分配すると言ふ。然も以上の幸福な結果は、歷史の頂點に於て、自然法則の絕對的必然さを以て實現されると云ふ。斯くの如

き主義が大衆を感電せしめ今日に至る迄、社會主義の最も主要な信仰箇條となつてゐることに何の不思議があらう。

此の歴史の窮極の時期に就き、マルクスの言ふ所を見よう。

『無産階級は、その政治的優越を用ひ、ブルヂオア階級より一切の資本を奪ひ取り、一切の生産機關を國家の手に集中し、かくして出來るだけ急速に生産力の總量を増加するに努めるであらう。

發展の過程に於て、階級的差別が姿を消し、一切の生産が全國民の一大團結の掌中に集められるに至れば、公の權力はその政治的性質を失ふに至る。元來政權と稱されてゐるものは、實は他の階級を壓迫せんが爲めの一階級の組織的權力に他ならぬ。若し、無産者がブルヂオアとの爭鬪に際し四圍の事情止むなく、自ら一階級を組織し、革命に依て支配階級となり、支配階級としての力に訴へて、舊い生産狀態を一掃し去るならば、無産者階級は此の舊生産狀態と共に、階級對立存在の條件及び階級一般をも一掃し、かくして無産者階級の一階級としての優越性をも廢棄して了ふ。

階級と階級對立とを有する舊いブルヂォア社會の代りに、我々は、各人の自由な發展が一切人の自由な發展の條件となつてゐる一の團結を持つに至るのである。(12)』

(12) Manifesto of the Communist Party, P. 32-34.

更にマルクスはその「資本論」に於て、將來の社會に關し、次の如く述べてゐる

『否定の否定は私有財産を復活させない。が然し資本制時代の獲得物たる協業や、並びに土地と勞働それ自身に依て生産された生産機關の共有や、それらのものを基礎とする所の個人的所有を造り出すことは確である。(13)』

(13) Das Kapital, 1922, Bd. 1, Kapitel 24, N. 7. S. 728.

或は政權が無產者の手に移つてから、此の幸福な事態が現出する迄には、非常に長期間を要するのではないかとの疑を抱く者があるかも知れぬが、マルクスは此の反對論を豫想し、續いて左の如く說いてゐる。

『個々人の自家勞働に立脚した分散的私有の資本制的私有への轉化は、事實に於て既に社會的生產を基礎として居る資本制所有の、社會的所有への轉化に比すれば、比較にならぬ程彌次的で、ぎごちない且つ困難な一行程であることは言ふ迄もない。前者に於ては小數横領者に依る民衆からの收奪が問題であり、後者に於ては民衆に依る小數横領者からの收奪が問題なるが故である。(14)』

(14) 同前 P. 729

マルクスが階級鬪爭理論に依て達成せんと企圖した所は明瞭である。マルクスの見解に依れば階級鬪爭は常に史上に變革を齎らした。最後には階級鬪爭は、資本と勞働との鬪爭に於て甚しく尖鋭化し、遂に最も輝かしい結果を招來すると言ふのである。而して一度此の最後の且つ最も惡化した

闘爭が終局すれば、最早社會には階級の別なく、從て階級闘爭なるものは無くなり、戰爭と貧窮との代りに、永遠の平和と完全な幸福が支配する。階級闘爭理論の斯くの如き來世論が、大衆を惹き付けるのは蓋し當然である。此の來世論こそは、被壓迫階級の怨恨一切に對して捌け口を與へ、同時に自由と平和及びすべての望ましいもの、豊富な黄金時代への展望を可能ならしめるものではないか。その第一の使命は、一切の不滿の輩を一旗幟の下に統一し、共同の敵と戰はしめることであり、その第二の使命は、實に現世を變じて天國とすることに他ならぬ。此くの如き將來を約束する理論は、科學の立場からすれば甚だ微弱なるものであるにも拘らず――此の理論は恐らくマルクスの見解中最も著しい弱點であらう――マルクス主義に對する一切の鋭い批判にも堪へ、よく現在迄生き殘つて來た。ゾムバルトに依れば、階級闘爭理論こそは、今日に至る迄尚社會主義の根本信條として存するものである。(15)

(15) Der proletarische Sozialismus, Bd. I, S. 384.

勞働苦

マルクスは、資本家間の葛藤は否定しなかつたが、併し彼等は勞働を搾取するに於ては一致してゐると主張してゐる。此の點に關しては、我々はマルクスの所説に少くとも一分の眞理を認めねば

ならぬ。勿論我々はマルクスの所説の如く、資本が合利的な利潤を擧げてゐるに過ぎぬ場合にも、尙資本家が勞働を搾取してゐるとなすことは出來ぬが、資本と勞働との間には或種の利害の衝突が存する事實は容認せねばならない。他の事情が同一であれば、勞賃が低率の際には利潤が高率になることは賭易い道理である。初期の經濟學者中、資本の蓄積を促進する爲、勞賃を低減する事が社會の利益であるとの論をなすものを生じた所以である。古典的經濟學者中には、勞賃は一定期間内は、生存に必要な最少限度より多く上らず、又それより著しく低落し得ぬと信じたものすらあつた。彼等の主張に依れば、勞賃が此の水準よりも高くなれば、人口は急激に增加し、勞働者間の競爭を誘發して直ちに勞賃を低落せしめる。若し勞賃が生活費の水準以下に低落すれば、人口の增加はその度を減じ、勞働者の供給稀少となり、勞賃は再び上騰すると云ふのである。此の理論は、マルクスの人口法則を基礎としたものであるが、絕對的必然性を有し、人口の如何ともすべからざる自然法則と思惟されてゐた。

然し事實上、爾來勞賃は、生存に必要な最少限度を遙に超えて著しく上騰し、尙今後も依然上騰の傾向を持つてゐる。

經濟理論は既に此のマルサス論を抛棄し、今日の經濟學者の殆ど全部は「高い勞賃」を支持するに至つた。就中米國の經濟學者は、高い勞賃は廉い勞働を意味すると迄極論ずるに至つた。彼等は勞賃が高ければ心然的に産業の發達を促し、勞働の能率及び生産力が増進される結果となると主張する。此の見解は、特に米國の經濟狀態に徴し、多分の眞理を含んで居る。米國に於ては、天然の資源及び廣汎な國内市場に比して勞働は比較的稀な爲、生産方法の徹底的改善に對する不可缺の先行要件である産業の擴張が、常に可能である。殊に移民の制限に依つて、外來の低廉な競爭を豫め阻止した結果、米國に於る勞働者の狀態は極めて惠まれてゐる。多量の原料品が意の儘となり、生産は極めて能率的であり、且、國内市場は頗る廣汎な結果、米國の産業は高率の勞賃を支拂ひ得る。換言すれば、米國に於ては勞働は稀少であり、著しく能率的であり、加ふるに外來の競爭に煩はされぬ爲、高率の勞賃を確保し得るのである。

けれども、他國の事情は米國に於けると全然同一ではない。英國の如き、獨逸の如き、日本の如き國々は、天然資源、勞働の供給及び市場擴張の可能性等に關し、極めて不利な立場に在る。然も此等の諸國に於ても、勞賃が相當に高く、健全で能率的な勞働力を維持し得る程度であれば、それは常に勞資兩者の利益とならう。故に、究極に於て、高い勞賃は低い勞賃に勝ると言ふことを得よう。然し乍ら産業の狀態には、高率の勞賃を支拂へば、必然的に失業者を發生させると言ふ場合が

あり、他方勞働者は容易に勞賃の低減に應じないことも理の當然である。從つて多くの空想家に與して、勞資の利益は常に同一であると主張することは、決して當を得たものではない。蓋し勞賃が高ければ利潤が少ないのが通常であり、反對に利潤が高い時には、屢々勞資は極めて低率となつてゐるのは賭易い道理であらう。然し、以上の事實から、勞賃の利害はあらゆる點に於て相反すると言ふ結論は出て來ない。勞賃が高ければ勞働者は健康を維持し、雇傭者と被傭者の感情は融和し、勞働者は會社の事務に忠實となり、社業の成功に關心を抱くに至る。これ等の點に於て兩者の利害は相一致する。故に雇傭者が單に利潤を增加しようと言ふだけの理由で勞資を引下げるのは、雇傭者側に於ける不正のみでなく、短見淺慮を暴露するものである。勞資兩當事者が均しく企業の發展乃至その能率增進に關心を抱くならば、結局、關係當事者全般の利益となることと疑を容れない。

然し事業の破綻を豫防し、乃至多數勞働者を解雇することを避ける爲、最も公正な雇傭者と雖も尙勞賃の引下げを斷行せねばならぬ場合も生じよう。此の樣な場合には、被傭者が從來通りの給料を固執することは矢張り不正であり不賢明である。若し勞資兩者の相互理解が此の程度に達すれば、兩者は本質的に利害同一な一經濟群を形成してゐることを悟り、階級鬪爭の起る餘地はなくなるであらう。少くとも兩者が互に相手方の誠意を充分熟知するに至れば、兩者の間に「苦い」感情の生ずることはあるまい。

處が勞資は互に反目し、互に憎惡し、且つ互に他に對して何等の關心を抱かぬ不俱戴天の仇敵であると言ふ彼のマルクスの階級鬪爭理論が、無條件で受容れられるのであれば、如上の相互的理解と協力とは明に實現不可能である。マルクスの理論が勢力を得たのは、初期の資本主義が勞働者の權利乃至福祉を無視し、專ら自己の利益をのみ追求し、拜金主義思想の結果として、徹底徹尾「弱い當事者」に不利な片面的契約で定めた悲慘な勞賃を支拂ふのみで、勞働者には何等の權利を與へずこれを單なる生産要素と看做してゐた事實に基づく。斯くの如く冷遇されてゐた當時の勞働者階級の間に、マルクスの憎惡理論が反響を見出したことに何の不思議があらう。社會主義運動は、すべての心事公正な人士をして勞働者の要求に目を開かせ、初期資本主義の大弊害を明るみに持來たす爲に寔に必要であつた。勿論、階級的憎惡は此の種の弊害に對する妥當な救濟策ではなく、却て益々弊害を甚しくしたに過ぎなかつたことは言ふ迄もなからう。

社會的立法

普通選擧が全般に行き渡つて以來、勞働者は、その權利を主張し、又資本主義組織の弊害及び不正と戰ふ事に就いて、法律上の手段を得るに至つた。若しこれをしも階級鬪爭と云ふならば、その意味は、今日にあつては、マルクスの說いた處と全然相違してしまつてゐる。曾ては國政の機關は悉く、

少數上層社會の掌中に在り、下層陣營は武器とすべき何等の法律的手段を持つてゐなかつた結果、社會的鬪爭なるものは殆んど存在しなかつた。然し選擧權が社會の各員全部に擴張されて以來、特に勞働者にとつて有利な要因となつたのは、勞働者が多數だと云ふ事實である。資本家は最初勞働者の要求、不平を簡單に無視し去ることが出來ず、國民の代表者多數の投票に依り、勞働者には好都合な政策を採用するの止むなきに至つた。立法の手段に依り、曾てマルクスが「資本論」に於て批判した幾多の弊害、即ち、例へば過剩勞働時間、不衞生な勞働狀態、生命健康に對する危險防止法の缺如、特に婦女兒童の夜業等は今日廢止されるに至つた。殆んどすべての文明國に於て八時間勞働制、及び一週四十八時間勞働制が最近採用されるに至つた。此の標準勞働時間に對しては尙除外例の條項が設けられてゐるが、一般の趨勢は飽く迄此の時間制を支持してゐる。マルクスは通風採光の惡い、冬は暖房裝置のない仕事場、及び二十人乃至それ以上詰め込まれる小さい勞働部屋のことを述べてゐるが、今や殆ど至る所に嚴格な衞生警察の取締規則が嚴重强行されるに至り、夜業は漸次絕對に必要な場合に限られ、婦女兒童の夜業は禁止されるに至つた。更に工場法は、道義の頽廢を豫防する見地から、年齢及び性別に依り勞働者を分離し、兒童勞働の最低年齢を定めこれを確立した。更に、國に依つては、婦女勞働者の最低賃銀を一定してゐる處もある。雇傭者はまた法律に依り、被傭者の生命健康保護の衝に當る義務を負はされ、被傭者がそれ自身に過失なくして

傷害を受けた場合には、雇傭者がその損害を賠償せねばならない。法律は更に一歩を進め、獨り勞働者の肉體的並びに道德的危險を豫防するに止らず、尙、勞働者が何等かの理由に依つて自身並びに家族の生活費を得ることが出來なくなつた場合には、これを扶助しようと試みて居る。此の方面に於る最初の試みは、前世紀の八十年代に、獨逸の國會を通過した疾病保險及び災害保險法案である。今一つの法律は、癈疾老年勞働者の生活を保證するものであつた。資本主義に對するマルクスの最大の非難は、資本主義が一大産業豫備軍を生ずと言ふ點にあつた　資本主義的生産方法が、勞働者の生活を著しく不安ならしめたことは否定し得ない。假りに何等かの理由に依つて茲に失業者が生じたとせよ、彼はたとへ彼自身に何等の過失なくとも、貧困のあらゆる苦楚を嘗め盡さねばならぬ。茲にこそ寔に一大問題が横はつて居るが、その解決は再び社會保險に俟たねばならない。過去廿年年間に於て、殊に世界大戰以後、多數諸國は失業保險法案を通過させて居る。

以上勤勞階級の生活狀態改善を目的とした一切の政策は、合法的手段を用ひて達成されたもので、その間何の暴力も用ゐられて居らぬ。その理由の一半は、教育の普及及び民主主義思想傳播の結果、人道主義的社會觀が勢力を得るに至つた爲であり、更に他の一半は社會主義宣傳の結果、公正な人士が勞働者の生活苦に眼を開き、且つ勞働者自身も議會制度を通じてその地位の向上を圖らん爲、自ら有力な政黨を組織した爲である。若し此の種の政治活動をも階級闘爭と呼ぶとすれば、階級闘

爭の語は如何にしてもマルクスの言ふ意味に解することが出來ない。此の種の政治的鬪爭は大いに正當であり、何等の暴力を伴はず、更に何等の惡感情をすら伴はなかつたからである。然らざれば自己の權利を防衛し要求する合法的手段に過ぎない法廷の訴訟手續も、悉く同樣に階級鬪爭と呼ばれることとならう。訴訟手續が法律とフェア・プレーの圈域を脫しない限り、何等嫌むべきものでないことは言を俟たぬ。」

同盟罷業と工場閉鎖

然し勞働爭議には他の二つの解決方法があり、これが稍すれもば感情の衝突、甚だしきは暴力沙汰や不正の事實を誘發する。同盟罷業及び工場閉鎖これである。同盟罷業權が法律上確認されたことは、勞働者にとつて前代未聞の政治的一大業蹟に違ひない。若し同盟罷業が終始公平正義を旨とするならば、恐らく社會正義を獲得する唯一の方策たる同盟罷業を、不道德と斷ずることは出來ない。然し此の手段に訴へるには愼重熟慮を要し、且、一切の平和的方法を試みたものでなければならぬ。當該企業が勞働者に提供し得る所を充分考慮せずに、徒らに罷業を決行することは、道德的見地から是認する事が出來ず、飽く迄排擊されねばならぬ。

此の如き罷業の結果は、雇傭者より利潤を奪ひ、更に生計の道を奪はれた無數の勞働者に苦難を

齎すに過ぎない。同盟罷業は、勞働者側の要求が正當であり、成功の見込充分で、且、他の一切の手段によるも勞資間の協定を達成し得ない場合にのみ認容され得る。又、罷業の決行に依り、罷業者等が正當に締結された契約を破ることとなる場合には、その罷業は不當と言はねばならぬ。即ち彼等が一定賃銀で一定期間働く合意をなしてゐる場合には、該契約所定の期間經過前に作業を罷めることは不道德の行爲である。

同盟罷業に照應するものは工場閉鎖である。從つて工場閉鎖も亦同盟罷業と同一の原則に依て判斷されねばならぬ。若し雇傭者が極めて重大な理由なくして勞働者を「締め出す」(ロックアウト)ならば、その行爲は不正である。殊に雇傭者は强者の立場に在り、被傭者よりも「より長く待つ」ことが出來る結果、屢々自己の横車を押通し得る事實に徵し、雇傭者側が工場閉鎖の手段に訴へる場合には、尙一層重大なる理由がなければならない。

勞働組合

今一つの勞働者の有力な武器は勞働組合である。勞働者が「弱い方の當事者」であり、從つて取引の力が少い以上、集團的取引に依つてその立場を强化しようと努めることは當然である。然し勞働組合は、屢々同盟罷業の統制を司るものである故、同盟罷業と同じ原則に從つて判斷されねばな

らぬ。雇傭者も亦勞働者の要求に對抗する爲に、所謂傭主團體を組織してゐるが、此の種の團體は工場閉鎖と密接な關係に在る以上、多少とも工場閉鎖と同樣な原則に從はなければならぬ。勞働者は時に依つて、正當乃至公平ならざる要求を提出することも珍らしくないので、雇傭者側も共同戰線を張りこれらの要求を拒否しても、決して不正の行爲となすことが出來ないが、雇傭者自身は强者の立場に在り、勞働者の正當な要求すら容易に拒否し得る結果、稍もすれば不道德の行爲に墮することを戒めねばならぬ。

勞働組合、雇主團體、同盟罷業、工場閉鎖等に關する右の所論を要約すれば、以上の手段は、稍もすれば勞資相互の不正を誘發する惧あるが故に、それ自體に於ては、立法的手段に比し、奬勵し難いものと斷ずることが出來よう。然し乍ら時には正當な要求を貫徹する唯一の手段たることもあるから、簡單に此等を不道德として一蹴し去ることは出來ない。但、稍もすれば濫用の弊に陷るが故に、如上の手段に訴へるに當つては愼重考慮を要し、就中同盟罷業と工場閉鎖とは、他の一切の手段が所期の結果を齎らし得ない場合にのみ用ゐらるべきものである。

階級鬪爭說の基督教的批判

更に階級鬪爭理論を、基督教的見地から判斷して見よう。マルクスの如く公然階級的憎惡を敎述

することは基督教に背反し、不道徳行爲であることは明瞭であるから、マルクスの理論が基督教主義と相容れぬものたることは縷述する迄もない。假りに、階級的憎惡が無產者階級の解放を招來する爲に必要な手段であることが立證されたとしても、よい目的を達成する爲にそれ自體惡い手段を用ゐることは許されざることである以上、階級鬪爭理論は依然反基督教的であり、不道德である。勞農ロシアに於ける「大量處刑」及びその他の暴擧を見れば、階級的憎惡が組織的に宣傳された結果遂行されるに至つた殘忍な事象を知ることが出來よう。然もこれはマルクスがその「共產黨宣言」の最後の一節に於て明瞭に豫言した所に他ならない。卽ち

『共產主義は自身の見解、目的を隱蔽することを卑む、彼等は敢然、彼等の目的は一切の現存社會狀態を强制的に顚覆することに依てのみ達成せられたることを公言する。支配階級をして共產主義革命の前に戰慄せしめよ。無產者の失ふ所は鐵鎖のみ、彼等の得る所は世界である。(16)』

(16) Communist Manifesto, P. 48.

ロシア革命は、革命に引續く數年の間、恐るべき恐嚇時代を現出したが、然もこれは單にマルクス理論の實踐に過ぎなかつた。眞の基督教徒が此の如き憎惡政策に與みし得ないことは自明の理である。

マルクスの階級鬪爭論を正しく批判するに當つては、常に鬪爭それ自體が決して其の目的でない

事を心得てゐなければならぬ。マルクスは闘争の爲の階級闘争を望み、勞働者の胸中に憎悪の念を植えつけたのである。此くの如きは全然反基督教的であり、不道徳である。けれどもこれは何れも、勞働者は彼等に與へられたる唯一の正しい方法としての穩當なる手段が全く失敗に終つた場合にも正しい要求を貫徹する爲に正々堂々たる闘争にすら入つてはならぬ、と言ふ意味ではない。一方雇傭者も亦、被傭者を土地乃至資本と同様な單なる生産要素と看做すことなく、均しく「人たるの存在」の權利を有する同胞たることを忘れてはならぬ。若し資本家が勞働者に對し、人として當然享受すべきものを提供し得ず、乃至は提供する事を肯じないならば、そは資本主義の罪である。勞働者の正當な要求をも無視し、利潤を増すことだけが雇傭者の唯一の目的であるとすれば、その雇傭者の所爲は不正と言はねばならぬ。財貨は究極に於て利潤の爲に作られたものではなく、人類の慾望を充足せんが爲に作られたものである。從つて若し、資本主義制度の下に於て、人類の大多數がその最も根本的な慾望をすら滿足せしめ得ないならば、そは資本主義制度の不健全を示す確實な證左と言ふことにならう。事實、初期の資本主義は餘りに利潤の追求に沒頭し、勞働者の正當な要求にも殆んど一顧だに與へず、その結果マルクスの資本論が勞働階級間にあの様な狂熱的反響を見出したのであつた。若し資本主義が此くの如く解されるならば、到底道義の要請と相容れぬことは事實であらう。蓋しそは物質的利益を人生究極の目的に祭上げ、人と人類の權利とを、物質的慾

望の下位に從屬せしめてゐるからである。これ所謂拜金主義の精神である。資本主義が大いに此の精神の「作興」に寄與した結果、拜金主義と資本主義とは屢々同意語として用ゐられるに至つた。資本主義の意味が此くの如くならば、これ疑ひもなく反基督教的であり唾棄すべきものと言はねばならぬ。

此の資本主義の拜金精神を批判した點に於ては、マルクスの所說は、正鵠を得てゐるのであるが資本主義的生產方法全體を非難したのは行き過ぎであつた。資本の使用が一大役割を演ずる生產制度たる資本主義が、人間の勞働による生產力を著しく增加し、從て消費に供さるべき財貨の量を增加したことは疑ふ餘地がない。資本主義は不斷の技術的進步を促がし、殊に人口稀薄の地方に於ては、生計の手段を增加し、その結果過去百年間に於て莫大な人口の增加を可能ならしめた。中世の職業組合制度のもとに於ては、今日の全人口を養ふことは全く不可能であらう。故に我々は資本主義の優れた一面を受容れ、その危險は之を警戒せねばならぬ。資本主義の生產制度を人道の趣旨に適應せしめる樣、我々は全力を盡さねばならない。資本主義は勞働者に對し、生產法の改善によつて增加する富は、之を正當に分配しなければならぬ。他方勞働者は、資本家に對し資本を提供することに依て社會を利益する。蓋し、此の方法に於てのみ、有力な新生產方法が人類全體の欲望滿足の用をなし得るのである。若し金錢の所有者が合理的利潤を擧げ得なければ、投資する意氣挫け、

結局社會の不利益を招來する。又若し彼が新な生産方法を發明するならば、彼は社會と和するものであり、これに依つて彼が莫大な利潤を收めようとも、何人も反對しないだらう。故にマルクスが一切の利潤を悉く勞働者の搾取であるとして非難してゐるのは、絶對に誤謬である。殊に現狀に於て、全體としての社會が苦まない爲には、資本が絶對に必要であり、然も利潤がなければ資本を生ずる道がない以上、特に然りと言はねばならぬ。若し一切の利潤が贅澤に費消し盡されるものとすれば、利潤に反對することも正しいことであらうが、事實上利潤の大半は再び新な投資として、換言すれば社會の利益の爲に用ゐられて居るのである。

從つて若し勞賃が勞働者の合理的生活の標準を確保するに充分であり、利潤が正當に企業を促進する程度に達するならば、勞資兩者の具體的分配に關し、時に爭議が起ることがあつても、勞資間には充分平和が存し得よう。若し兩者が互に相手方の權利を承認し、一切の爭議の公正な解決を期する爲に全力を盡すならば、社會革命の要もなく、乃至マルクスの意味に於る階級鬪爭も不用である。公平、正義、博愛の精神は、確に憎惡反感よりも適に社會を益することの速なるものである。故に、前者を促進强調して後者を抑制阻止することこそ、一切の眞摯な勞働運動の指導者乃び社會改良主義者の使命でなければならぬ。

第四章　マルクス價値論

價値の計量者としての平均勞働時間

マルクスの歴史的發展說に據れば、資本主義組織は、必然的に社會主義に導くものである。其の過程は如何と云ふと、資本額は益々增大し、競爭は益々激甚を加ふる結果、小生產者は益々消滅し終に全生產機關は少數なる大資本家の手中に統一せられ、資本の集中と集積が實現する。マルクスに據れば、此狀態から社會主義に推移するのは只小さい一歩に過ぎない。卽ちプロレタリアに依つて此の巨大な運動が繼承されさへすればよいのである。すると新しい黃金時代が現出して、一切の階級差別は消滅し、歴史的發展は其窮極に達する。此の發展を促進する二大原動力となるものは、マルクスに據れば、間斷なく增大する資本の蓄積と、資本に對抗するプロレタリアの組織化とである。そこでマルクスは此の資本の蓄積を如何樣に說明するかと云ふに、彼は之を勞働價値說 Arbeitswerttheorie 及び餘剩價値 Mehrwerttehre と名附くるものを以てしてゐる。

マルクスに依れば、商品は其の中に含まれてゐる人間の勞働に比例して相互に交換せられるものである。彼は、アダム・スミス以來經濟學に用ひられてゐる使用價値と交換價値との區別を踏襲する。使用價値とは、或物が人間の慾望を滿足させる效用度を云ふ。交換價値とは、之に反して或物

が他の有用物と交換され得る能力である。マルクスは此の交換價値を無造作に價値と名附け、其の大いさは其の物の中に含まれてゐる勞働に基づくものと主張する。

經濟の現象を皮相的に觀察した眼を以てすれば、極端に相違した性質の二個の商品が互に或一定の比例を以て交換されてゐる樣に見える。之に依てマルクスは、此の商品の中に、其の兩者が等しくある處の或第三のものがなければならないと結論する。併し此の共通なるものは、マルクスに依れば、商品の使用價値ではあり得ない。勿論交換物體は使用價値を有する事が必要である。即ち人間の慾望を滿足し得る物である事が必要である。使用價値は事物の物理的及び化學的性質に依て限定されてゐる。この性質は、マルクスの說に依れば、互に相ひ異なる物であるが故に、此の性質を基礎とすれば、二つの商品を互に等置する事が出來ない。けれども凡ての有用物は共通なる或物を持つてゐる。即ちそれらは皆人間の勞働の所產なのである。故に商品は、互に其の中に含まれてゐる勞働の割合に從つて交換されると云ふのがマルクスの結論である。

こゝでマルクス自身の言葉を引用してみよう。曰く

『二つの商品、例へば小麥と鐵とを採らう。これら二商品の交換比例は如何やうにもあれ、それは常に、與へられた分量の小麥を、或分量の鐵と等位に置く方程式、例へば、一キヴター小麥＝a ツヘントナーの鐵を以て示すことが出來る。此の方程式は何を意味するか。それは同じ大

さの一共通物が、二つの相異つた物卽ち一クォターの小麥とaハンドレッドウェイトの鐵との內に存在する事を示すのである。故に此の兩者は、それ自體に於て小麥でもなく、また鐵でもない或三者に等しいものである。隨つてこの兩者の各は、それが交換價値である限り、斯樣な第三者に約元し得るものでなくてはならぬことになる。……

此の共通物は、商品の幾何學的、物理學的、化學的、又はその他の自然的性質ではあり得ない。商品の有形的性質は總じてそれが商品を有用ならしめ、使用價値たらしむる限りに於てのみ、考慮に入るものである。他方にまた、商品の使用價値からの抽象こそ、商品の交換比例をば一目瞭然的に特徵するところのものである。……各商品は、これを使用價値として見れば、互ひに質を異にするといふことが先に立つが、交換價値として見れば、たゞ量を異にし得るに過ぎず、隨つて使用價値の一原子をも含まないのである。(1)』

(1) Das Kapital, Hamburg 1922, Bd I, s. 3-4.

此處迄の處でマルクスは、商品の使用價値は、其交換關係に對して標準とならないばかりでなく總じて問題の圈內に這入つて來ないものたる以所を、立證したと考へてゐる。そこで彼は他の說明に進んで行つて次の如く述べてゐる、『そこで商品體をその使用價値から離れて見るとき、殘る所はたゞ勞働生產物たる一性質のみである。然し勞働生產物でさへも、既に我々の手の中で變化してゐ

る。勞働生産物の使用價値から抽象することは、同時にまた、勞働生産物を使用價値たらしめる有形的な諸成分及び諸形態からも抽象することになる。斯くして勞働生産物は、もはや、卓子でもなく、家でもなく、絲でもなく、その他何等の有用物でもない。勞働生産物の凡ゆる有形的性質は消え去つてゐる。それはもはや、指物勞働、建築勞働、紡績勞働、その他如何なる一定の生産的勞働の産物でもない。勞働諸生産物の有用的性質と共に、それらの物に表現されてゐる諸勞働の有用的性質も亦消滅し、これら諸勞働の種々なる具體的形態も亦消滅する。諸勞働はもはや、互に相異なるところなく、總べてが等一なる人間勞働、即ち抽象的人間勞働に約元されてゐる。

『然らば、勞働諸生産物の殘基は何であるかを考察しよう。右の抽象の後に勞働生産物に殘るものは、同一なる空幻的の對象性のみである。即ち無差別なる人間勞働の、換言すれば、その支出の形式に頓著するところなく考へた人間勞働力の支出の單なる凝結のみである、これらの物は結局たゞその生産のために人間勞働力が支出され、人間勞働が蓄積されるといふことを示すに止まる。これ等の物は、斯くの如き共通なる社會的實體の結晶として見るとき、價値――商品價値――なのである。

『商品の交換關係に於ては、交換價値なるものは使用價値から全く獨立したものとして現れることは、我々の既に見たところである。然るに、勞働諸生産物の使用價値から現實的に抽象してしまふと上に限定せる如き價値が殘る。故に商品の交換關係たる交換價値に現はれるところの共通物とは、即

ち價値であるといふことになる。(即ちこゝにマルクスは交換價値と價値とを等置してゐる――筆者註。)要するに、一の使用價値、即ち財は、抽象的意義に於ける人間勞働がその中に對象化され實體化されてゐるが故にのみ價値を有するのである。(2)』

(2) Das Kapital, Bd I. S. 4ff.

かゝる方法に依つてマルクスは、商品の價値は、商品中に含まれたる、抽象的に觀たる人間の勞働が、決定するものたることを、證明し得たと信じてゐる。即ち勞働は、商品の價値を形成する實體である。然らば、價値の大いさは如何にして秤量さるべきか。マルクスは之に答へて曰く

『それ(商品)の中に含まれてゐるところの「價値形成實體」たる勞働の量に依つて秤量されるのである。而して勞働の量はまた、勞働の時間的繼續に依つて秤量され、勞働時間は更らに、時、日等の如き一定の時間部分を尺度とするのである。(3)』

(3) Das Kapital, Bd. I, S. 9.

けれども、商品中に具象化された勞働の時間量が其價値を決定するものならば、不熟練な或は怠惰な勞働者に依つて作られた商品は、更に價値が多い事になる筈である。何となれば、多くの時間が費されてゐるからである。此の非難に對してマルクスは「平均勞働力」を秤量單位と見るべき事を主張して其の答としてゐる。處で此の平均勞働力は、復た其の時々の勞働生産力に左右されるも

のであるが故に、マルクスは「社會的必要勞働時間」と云ふ概念を持ち出して來てゐる。此の概念を彼は「社會的必要勞働時間とは、現存せる社會的に標準を成す生産條件と、勞働の熟練及び能率の社會的平均程度とを以て、何らかの使用價値を生産するに必要な勞働時間を指すのである(4)」と定義してゐる。

(4) Das Kapital, Bd. I. S. 5.

勞働力の評價

此の勞働價値說をマルクスは商品體のみならず、人間の勞働力にも適用した。彼に依れば、人間の勞働力は、鐵、衣服材料、家屋、食料品等と同じ一つの商品である。少くとも資本主義組織に於てはさうである。マルクスの說に依ると、資本主義生産の本質的特徵は、商品所有者と、勞働力のみの所有者とが、相互に對立してゐる點にある(5)。勞働者は資本家の所へ其の勞働力を商品として賣りに行く。資本家は彼に對して其の價値（交換價値）を支拂ふ。此の價値は、勞働者と其の家族との生計に必要なる使用貨物を生産する爲に要すべき勞働時間に、對應してゐるものである。言葉を換へて言へば、働き得る爲には勞働者は絕えず榮養、衣服、住居、其の他これに類する使用貨物を消費して其の勞働力を維持し補充して行かねばならぬ。勞働者が自己を保持する爲には、家庭

を作り其の生活に必要なる支出をして行かねばならぬ。勞働者と其の家族とに缺くべからざるこれ等のあらゆる使用貨物の生産には、一定の社會的勞働時間が必要である。これをマルクスは、勞働力生産のため社會的に必要な勞働時間と名付けてゐる。マルクスに依れば、此の勞働時間の等値貨幣が勞働力の價値（交換價値）となるのである。これを勞働者は、其の勞働力を商品として資本家に賣る場合に、受領するのである。

（5）Das Kapital, Bd. I, S. 131 ff.

餘剰價値

ここでマルクスの主張するところに依れば、勞働者は毎日自己の生活維持の生産に必要なる時間よりも、多く働き得るものである。從て勞働者は其の勞働時間の一部分を資本家の爲に無報酬で働く事になる。彼が其の餘計な時間に生産するところの物は、資本家に取つては其の入費以上の過剰即ち餘剰價値と云ふことになる。社會的に必要なる勞働時間のみが資本家に依て支拂はれてゐるので、勞働者が其れ以上に生産手段に價値を生ぜしめて行く處のものは、無報酬の勞働で、勞働者には何一つ齎らすところは無いが、資本家に取つては餘剰價値として、居ながらにして轉がり込んで來る處のものである。此の「餘剰價値」は、マルクスに依れば、資本蓄積の源泉である。餘剰價値

は、勞働者を生産機關から分離する事に基いてゐるもので、此の分離はまた資本主義組織の基礎となつてゐる。此の關係が一度定まると、資本蓄積は各勞働期に繰り返されて行くばかりではなく、高い梯子を昇るが如く、益々增進して行くものである。

以上がかの有名なマルクスの餘剩價値論の大要である。次にマルクスが如何に其の所論を證明してゐるかを概觀してみよう。彼曰く『勞働力の價値は、他の總べての商品の價値と同樣に、この特殊の物品の生産隨つて又再生産に必要なる勞働時間に依つて決定される。……個々人の存在が與へられてゐるとすれば、勞働力の生産なるものは、要するに彼等自身の再生産即ち生存維持に外ならぬ。生きた個々人はその生存を維持する上に、一定量の生活資料を要する。そこで、勞働力の生産に必要な勞働時間とは、歸するところ、この生活資料の生産に必要な勞働時間であるといふことになる。換言すれば勞働力の價値とは、勞働力の所有者の生存維持に必要な生活資料の價値である。……平均的一日に必要な斯かる商品量の中に社會的勞働が六時間含まれてゐるとすれば、一日の勞働力には、半日分の社會的平均勞働が體化されてゐる譯である（即ちマルクスの說に從ひ、一日の社會的勞働を十二時間と算すれば。――筆者註）。語を換へていへば、一日の勞働力を造るには半日分の勞働が必要だといふことになる。一日の勞働力の生産に必要なこの勞働量は、勞働力の日價値換言すれば日々再生産される勞働力の價値を構成するものである。（6）

(6) Das Kapital, Bd. I, S 133-135.

『然るに、勞働力に含まれてゐる過去の勞働と、勞働力に依つて給付され得る生きた勞働とは、換言すれば勞働力の日々の保存費と日々の支出とは、二つの全く相異つた大さであつて、前者は勞働力の交換價値を決定し、後者は勞働力の使用價値を形成するものである。勞働者を二十四時間生かして置く爲に半日分の勞働が必要であるといふことは、決して彼れは全一日分働かしむることを妨ぐるものでない。斯くの如く、勞働力の價値と勞働力行程に於けるその價値增殖とは、二つの相異つた大さである。資本家は勞働力を購買するに當り、この價値差額を眼目に置いてゐるのである。綿絲なり深靴なりを造るといふ勞働力の有用なる性質は、避け難き一條件たるに過ぎぬ。なぜならば、價値を形成する爲には、勞働は有用な形で支出されねばならぬからである。然し、眞に決定的の要件となるものは、價値、而も自身が有してゐるよりも以上の價値の源泉であるといふ勞働力獨特の使用價値である。つて、資本家が勞働力に期待する特殊の奉仕とは、この使用價値に外ならぬ。而して資本家は勞働力を購買するに當り、商品交換の永久的法則に從つて行動する。實際のところ、勞働力の販賣者は、他の各商品の販賣者と同樣に、販賣品の交換價値を實現して使用價値を讓渡するのである。……貨幣の所有者は勞働力の日價値を支拂つた。隨つて、勞働力を一日中使用すること即ち一日分の勞働は、彼れの所有に屬することになる。勞働力は一日中作用し、一日中勞働を給付

し得るに拘らず、勞働力を一日間保存するには半日分の勞働を要するのみであるといふ事實、換言すれば、勞働力の使用が一日間に造り出す價値は、勞働力自身の日價値の二倍に當るといふ事實はその購買者から見れば、特殊の一僥倖であつて、而もその販賣者に對する何等の不正をも意味するものでない。(7)』

(7) Das Kapital, Bd. I, S. 156 ff.

不變資本及び可變資本

此の後のマルクスの思想上の進展を理解するためには、先づ彼の價値形成說を見ておかなければならぬ。

凡ての生產には、生產手段(原料、建築物、機械等)と人間の勞働とが含まれてゐる。マルクスに依れば、生產手段は別に新價値を造り出す物ではなく、人間の勞働がこれを造る。原料は無論その固有價値を有してゐるが、人間の勞働に接する事に依つて新生產物と成つて行く。機械、器具、建築物等は、歲月の經過と共に消磨して行く。つまり、それぞれの生產期間中に、其の固有價値の一小部分を新生產物に分與して行くのである。併し自らは新價値を造り出す事はない。之に反して人間の勞働は新價値を造り出し、之を生產手段に分與して行く。尙きた、生產機關の價値が新生產

品の中に轉化されて行くのも、人間の生きた勞働の作用に歸すべきである。

マルクスは、生産手段のために投ぜられたる資本を、不變資本と名附けてゐる。何となれば、其の價値は生産行程中に變化する事が無いからと云ふのである。人間の勞働に投ぜられたる資本は、彼は可變資本と名附けてゐる。何となれば、其の價値は生産行程中に變化する、即ち勞働力の使用價値と交換價値との間の差額が本となつて、增加するからといふのである。故にマルクスは次の樣に論じてゐる。曰く、

『我が資本家はこの事態を見て獨り微笑むのであるが、彼れは豫めそれを看破してゐるのである。さればこそ、勞働者は作業場に於いて、六時間の勞働行程に要する生産手段のみでなく、また、十二時間の勞働行程に必要なる生産手段をも見出すことになるのである。十斤の棉花が、六時間の勞働を吸收して十斤の綿絲に轉化されるとすれば、二十斤の棉花は即ち十二時間の勞働を吸收して二十斤の棉絲に轉化されることになるであらう。いま、この延長された勞働行程の生産物を觀察して見よう。

『二十斤の棉絲の中には、今や五日分の勞働が對象化されてゐる。即ち四日分は消費された棉花及び紡錘量の裡に對象化されてゐたものであり、一日分は紡績行程の進行中棉花に依つて吸收されたものである。（即ち、勞働者に依つてなされる一日の勞働は、材料たる棉花に依つて吸收される。——

筆者註。）然るに、五日分の勞働を金で言ひ現したものは、三十志卽ち一磅十志であつて、棉絲二十斤の價格に相當する。棉絲一斤の價格は從前通り一志六片である。然しこの行程に投ぜられた諸商品の價値總額は二十七志であり、而して棉絲の價格は三十志である。卽ち生産物の價値は、その生産上に前貸された價値に比し九分の一の增大を來たした譯であつて、二十七志は三十志となり、三志の餘剩價値が附加されたことになる。手品は遂に成功したのである。貨幣は資本に轉化された(8)』

(β) Das Kapital, Bd. 1, S. 157.

餘剩價値率

マルクスの言ふ所に依れば、資本家の關心事は、一にかかつて勞働者をして能ふ限り多くの餘剩價値を生ぜしむるにある。是れは種々樣々の方法で實現せしめる事が出來る。假令ば、勞働日の延長、勞働者の必需品の價格低下、或は勞働賃銀の低減等である。餘剩價値と可變資本との比（B:v）を、マルクスは餘剩價値率 Mehrwertrate と名附けて居る。此の率は、勞働日の延長、乃至「必需勞働時間」の短縮等を行ひ、勞働者の無報酬勞働時間を增大すればする程、自然に增加する。「無報酬勞働」が增大してゐることは、此の二つの場合に共通してゐる。故にマルクスは「搾取」の度を現はすためには、餘剩價値率（m:v）の代りに、餘分勞働が必要勞働に對する比を以て言ひ現は

してゐる。假令ば「社會的勞働日」を十二時間として、「必要勞働」を六時間とすれば、「餘分勞働」と必要勞働との比例は∴∴で、從て餘剰價値率は100%である。若しまた勞働日が十二時間から十四時間、十六時間或は二十時間などに延長さるれば、そして「必要勞働」を元の儘にして置けば餘剰價値率は、延長されたる餘分勞働に比例して増大される。早期の資本主義は、實際數十年に渡つて勞働日を延長し行つたので、勞働者は遂に之に反抗し、一八四八年には「平日」Normaltag を十時間とする事、を法律を以て强制せしむるに至つたのである。」

絶對的及び相對的餘剰價値

マルクスは、尙その餘剰價値論中に於て、絶對的餘剰價値を相對的餘剰價値から區別してゐる。絶對的餘剰價値は、何よりも先に雇傭勞働者の數と不變資本の大さとに、密接な關係を持つてゐる。或工業に於て、不變資本が小であり可變資本が大である時には、マルクスの說に從へば、絶對的餘剰價値は大となる。何となれば、多數の勞働者が餘剰價値を造り出すからである。併し不變資本が増大し可變資本が減少すれば、減少せられたる勞働者の數に比例して餘剰價値が小さくなる。處で搾取の度を高めて行く事は可能なのであるから、可變資本に對する餘剰價値の割合は増加する事になる。斯くして増加されたる餘剰價値を、マルクスは相對的餘剰價値と名附けてゐる。此の種の増